長野市の埋蔵文化財第94集

浅川扇状地遺跡群

# 小 板 屋 遺 跡

――（仮）東邦団地浅川造成地点――

1998・3

長野市教育委員会

# 序

社会生活の変化と共に「物の豊かさ」から「心の豊かさ」がもとめられる今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできない貴重な国民的な財産であると考えます。

特に埋蔵文化財は、直接大地に刻み込まれた歴史であり、当時の物質文化のみならず信仰・宗教等の精神史など文化の始源をも内包する基準資料であります。こうした意味から埋蔵文化財そのものが歴史・文化を考える上での実証者といえましょう。

このたび東邦商事株式会社よる宅地造成事業に伴い、浅川扇状地遺跡群小板屋遺跡の発掘調査を実施いたしました。

事業地周辺は過去の調査で重要な遺構・遺物が発見されており、古代史研究上注目されている地域であり、今回の調査でも多大な成果を得ることができました。

本書はその成果を要約し、長野市の埋蔵文化財第94集として上梓するものです。この報告書が地域の古代史の解明や文化財保護の一助として、学術的に関係各方面に広くご活用いただければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書刊行に至るまで公私にわたり多大なご援助・ご指導を賜りました関係諸機関ならびに各位に心からお礼申し上げます。

平成10年３月

長野市教育委員会
教育長　滝澤忠男

# 例　　言

1　本書は、東邦商事株式会社による「(仮) 東邦団地浅川造成」に伴い埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。

2　調査は、東邦商事株式会社代表取締役 増子　清と長野市長 塚田　佐との「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」に基づき、長野市教育委員会埋蔵文化財センターが直轄事業として実施した。

3　調査地は、長野市浅川押田字小板屋256-11番地他に所在する。

4　発掘調査は、平成９年10月６日から11月10日にかけて行い、調査面積は650㎡である。

5　調査による諸資料は、長野市埋蔵文化財センターで保管している。遺跡の略号は「ＡＫＯＩ」である。

6　本書は、発掘調査で検出・確認された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点をおいた。資料掲載の要点は下記のとおりである。

＊　遺構は、検出されたものの中から時期が明確に把握しうるものを中心に掲載した。ただし、特殊なものはこの限りでない。時期や性格不明なものは掲載対象からはずしたが、これらに関しての図面出土遺物等は閲覧し得るように保管している。

＊　遺構の略号・番号等は、出土遺物等の検索の都合上から調査時に用いたものを使用している。

＊　本文および掲載図中に遺構の略号を用いた。ＳＢは竪穴住居址、ＳＫは土坑、ＳＤは溝址、ＳＸは性格不明遺構をそれぞれ表す。

＊　遺構測量は、平面直角座標第Ⅷ系の座標値と日本水準原点の標高を基準とするため株式会社写真測図研究所へ業務委託した。

＊　土器類実測図のうち、スクリートンーで粗点アミ掛けのものは黒色土器の黒色処理部を表示し、種類別では断面が白抜きのものは土師器・黒色土器、黒塗りのものは須恵器、アミ掛けのものは陶磁器類を表す。

＊　出土土器観察表の記載は次の要領で行った。

番号：実測図番号と写真番号は一致する。

法量：実際の計測値または図上復元による計測値を記した。

依存：図示した部分依存状態を記した。ママは実測図状態で残存していることを表す。

# 目　　次

序・例言・目次

第Ⅰ章　調査の経過……1
　第１節　調査事務の経過……1
　第２節　調査日誌抄……1
　第３節　調査の体制……2

第Ⅱ章　調査地周辺の環境……3
　第１節　地理的環境……3
　第２節　考古学的環境……5

第Ⅲ章　遺構と遺物……7
　第１節　遺構の分布……7
　第２節　遺構と遺物……9

第Ⅳ章　ま　と　め……23

報告書抄録・奥付

# 挿　図　目　次


１図　調査地位置図 …… 3
２図　駒沢川・浅川扇状地と河川・堰図 …… 4
３図　調査地と浅川西条遺跡(右下)地形図 …… 4
４図　調査地周辺の字境図 …… 4
５図　調査地周辺の主要遺跡分布図 …… 5
６図　開発区域と調査地 …… 7
７図　Ｃ区遺構分布図 …… 7
８図　Ａ区(左)・Ｂ区(右)遺構分布図 …… 8
９図　ＳＢ３・６・７・９・12・14 実測図 …… 13
１０図　ＳＢ４・５・８・15・16、ＳＫ２・５実測図 …… 14
１１図　ＳＢ13、ＳＸ３～５、ＳＫ１・６・７実測図 …… 15
１２図　ＳＢ３・４・６・10・12・14 出土土器実測図 …… 16
１３図　ＳＢ９・13・16、ＳＸ３・４、ＳＫ６・７検出面出土土器実測図 …… 17

# 第Ⅰ章　調査の経過

## 第１節　調査事務の経過

調査地周辺は周知の埋蔵文化財包蔵地である「浅川扇状地遺跡群」の範囲内にあり、埋蔵文化財の包蔵が予想された。開発事業者からの依頼により平成９年９月18日に試掘を伴う埋蔵文化財確認調査を実施した。その結果地表下約50㎝の深さから黒褐色砂質土を主体とする遺物包含層が確認された。協議の上、地下埋設物等の設置により埋蔵文化財の破壊が懸念される道路建設部分について記録保存を目的とする発掘調査を実施することになった。以下、日を追って書類の流れを記載する。

10月２日付　長野市教育委員会教育長宛に「開発行為にともなう埋蔵文化財発掘調査について（依頼）」提出がある。同日付　文化財保護法第57条の２第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」を受理し、長野県教育委員会教育長宛に進達する。

10月３日付　東邦商事株式会社代表取締役 増子　清と長野市長 塚田　佐とで「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」、長野市長と株式会社写真測図研究所代表取締役 杉本幸治とで「遺構測量業務委託契約書」、長野市長と株式会社北条組代表取締役 北条高己とで重機等の「賃貸借契約書」をそれぞれ締結する。

10月６日～11月10日　発掘調査を実施する。以降３月15日まで整理調査を行う。

10月７日付　文化財保護法第98条の２第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告について」を長野県教育委員会教育長宛で提出する。

11月11日付　長野中央警察署長宛に「埋蔵物発見届」、長野県教育委員会教育長宛に「埋蔵文化財保管証」、委託者宛に「発掘調査終了届（通知）」をそれぞれ提出する。

12月８日付　長野県教育委員会教育長より「埋蔵物の文化財認定について（通知）」がある。

３月16日付　調査費減額に伴う「埋蔵文化財発掘調査変更委託契約書」を締結する。契約変更理由：当初に予想された規模より遺構の数が少なく、発掘作業量が減少し、人件費および重機等賃借料の経費が減少したもの。

３月18日付 「発掘調査委託業務実績報告書」を提出する。

３月31日付 『浅川遺跡群小板屋遺跡』を刊行する。

## 第２節　調査日誌抄

10月６日　調査器機材搬入。プレハブ設置。表土除去作業（～８日）。

10月７日　作業員による遺構検出作業（～９日）。

10月13日　ＳＢ１～３、ＳＫ１、小穴の調査。

10月14日　ＳＢ４・５、ＳＫ２、小穴の調査。ＳＢ１～３、ＳＫ１・２の写真撮影。

10月15日　ＳＢ４～６、ＳＫ３・４、小穴の調査。

10月16日　ＳＢ５～８、ＳＤ１、小穴の調査。ＳＢ４・５の写真撮影。

10月17日　ＳＢ６・８、ＳＫ６、小穴の調査。ＳＫ３・４写真撮影。

10月20日　ＳＢ６・９、ＳＫ６、ＳＤ２・３、ＳＸ１、小穴の調査。

10月21日　ＳＢ９～11、ＳＤ４～６、ＳＸ２、小穴の調査。

10月22日　ＳＢ12・13、ＳＤ７・８、ＳＸ３、小穴の調査。ＳＢ10～12の写真撮影。

10月23日　ＳＢ13、ＳＫ７、ＳＤ９～12、小穴の調査。ＳＸ３の写真撮影。遺構測量。

10月24日　ＳＢ13・14、ＳＫ８・９・11、ＳＤ10～13・15、小穴の調査。

10月28日　ＳＢ８・13・14、ＳＫ10、ＳＤ６、小穴の調査。ＳＢ13の写真撮影。

10月29日　ＳＢ15、ＳＤ14、ＳＸ４・５、小穴の調査。ＳＢ４～６・８・９・13、ＳＫ７、ＳＤ１写真撮影。

10月30日　ＳＢ15・16、ＳＸ４・５、小穴の調査。ＳＢ６・14の写真撮影。遺構測量。

10月31日　ＳＢ15・16、ＳＫ13、ＳＤ14、ＳＸ４～６、小穴の調査。

11月４日　ＳＢ７・16、ＳＫ12・13、ＳＤ16、ＳＸ４、小穴の調査。前記した遺構の写真撮影。

11月５日　ＳＢ16，ＳＤ７、ＳＸ４の調査。調査区全景の写真撮影。遺構測量。

11月７日　遺物の取り上げ。

11月10日　調査機器材の撤収。

## 第３節　調査の体制

長野市域における埋蔵文化財の保護については、学術調査および史跡等の保護保存に関わる調査は長野市教育委員会事務局社会教育課が担当し、開発行為に対応する緊急発掘調査は埋蔵文化財センターの直轄事業として実施している。

| | | |
|---|---|---|
| 調査主体者　長野市教育委員会教育長 | | 滝澤忠男 |
| 調査管理者　埋蔵文化財センター所長 | | 丸田修三 |
| 管理補佐 | 所長補佐 | 小林重夫（庶務担当）・矢口忠良（調査担当） |
| 庶務係 | 係　長 | （小林重夫）（予算管理・契約事務・庶務） |
| | 職　員 | 青木厚子（庶務） |
| 調査係 | 係　長 | （矢口忠良）（編集） |
| | 主　査 | 青木和明（社会教育課・センター兼務） |
| | 主　査 | 千野　浩（遺物写真） |
| | 主　事 | 飯島哲也 |
| | 主　事 | 風間栄一 |
| | 主　事 | 小林和子（調査主任、試掘調査・保護協議） |
| | 専門主事 | 清水　武 |
| | 専門員 | 中殿章子・西沢真弓・山田美弥子・小野由美子・堀内健次（調査員）・藤田隆之・宮川明美・小林まゆ佳 |

発掘作業員　金子ユキ・小林さと・小林三郎・小林敏江・佐藤君江・佐藤幸子・佐藤ひで子・中沢秀子・成田孜子・新津三千子・原　汪子・宮沢けさよ・宮沢芳美・宮島静美・山口悦子

整理調査員　青木喜子（遺物図浄書）・池田寛子（遺構図浄書）・武藤信子（遺構製図・遺物実測）・鳥羽徳子（遺物実測）・中殿章子（遺物実測）・矢口栄子（遺物実測）

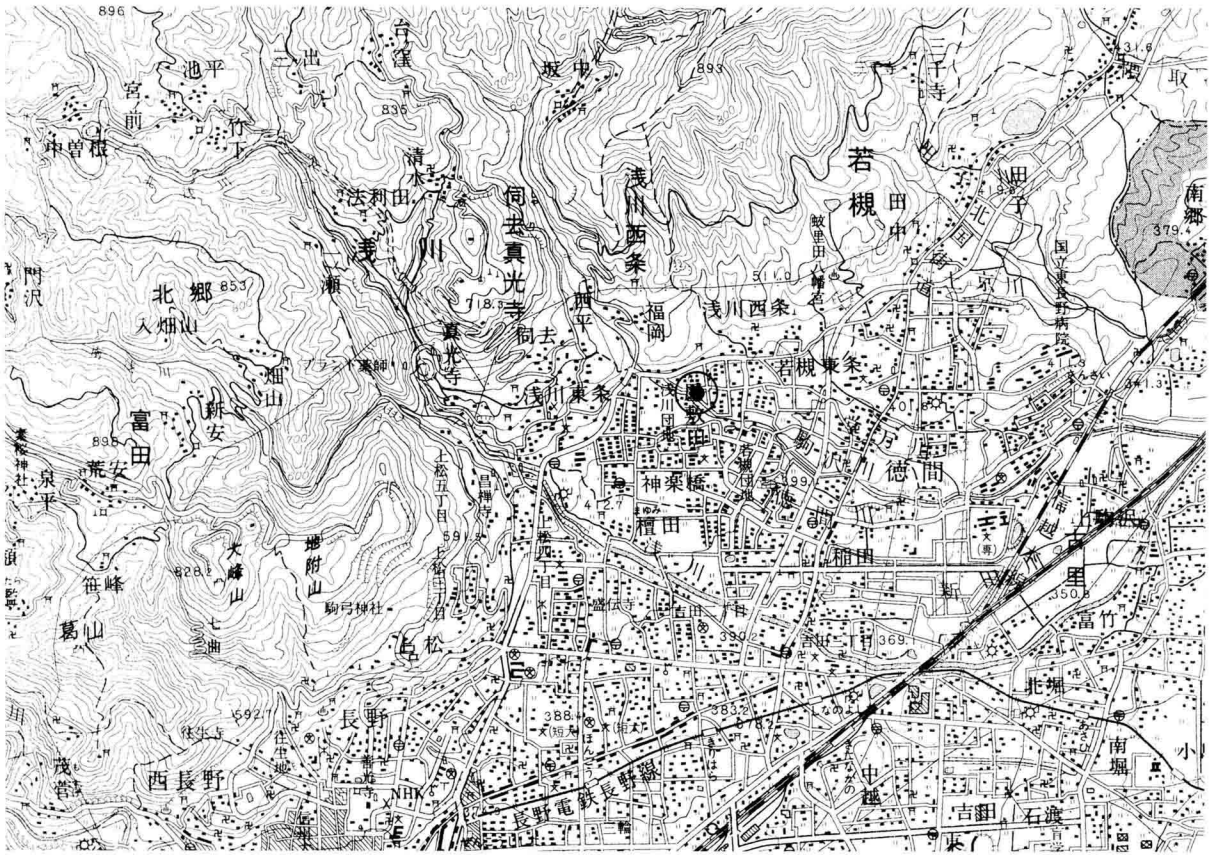
整理作業員　岡沢治子・倉島敬子・小泉ひろ美・岡崎文子・田中はま江・田中むつ子・塚田容子・徳成奈於子・冨田景子・西尾千枝・松沢ナオエ・三好明子・向山純子・村松正子

# 第Ⅱ章　調査地周辺の環境

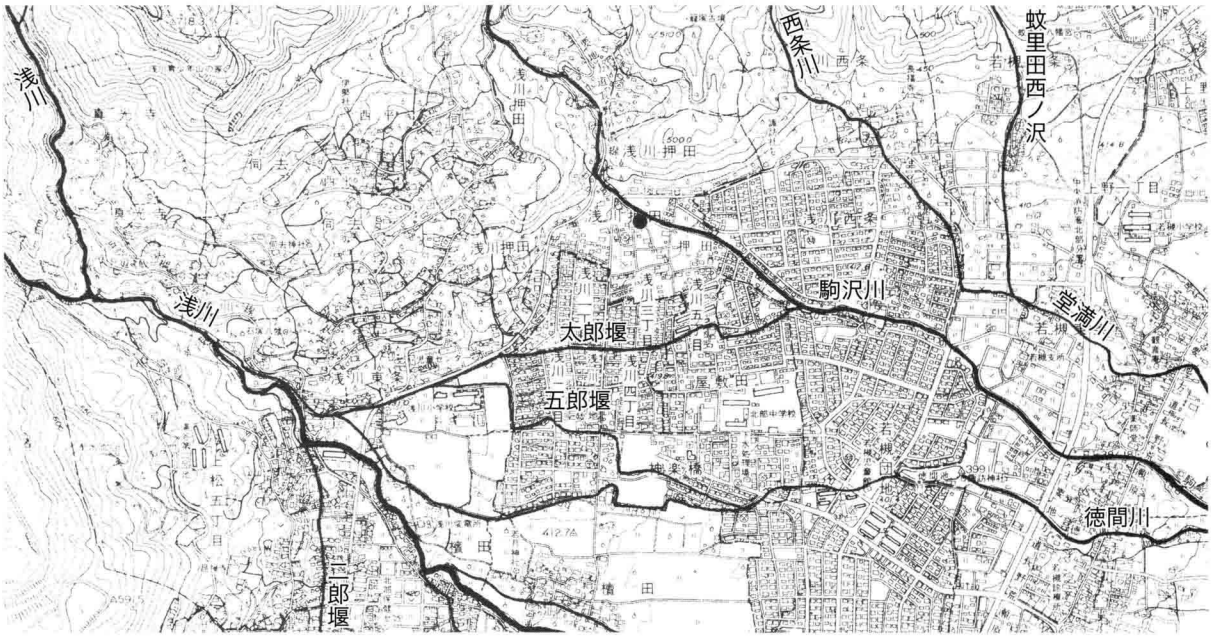
## 第１節　地理的環境

小板屋遺跡は浅川扇状地遺跡群内の遺跡として周知されているが、詳細にみると駒沢川が形成する中規模扇状地の扇頂部に位置する。駒沢川は浅川字大沢と字菅沢地籍より発し、浅川西条の谷を南南東に向かって流下する小河川である。下流域で北部山地からの小河川の水を集めた堂満川と浅川から取水した徳間川や新田川と合流してやがて浅川に注ぎ込む。扇状地は谷口の塚田橋付近より南の浅川および南東の若槻方面に２度の勾配で半円錐形に広がり、扇央から扇端部にかけては浅川の扇状地と合体し複合扇状地を形成する（１図）。このように観察すると神楽橋や徳間地域は駒沢川扇状地の範疇に入る。また、この扇状地の南端は浅川団地南に開設された浅川から取水・開削された太郎堰付近で勾配が１度となり浅川扇状地の緩やかな平坦面と重なる。一方、駒沢川扇状地の方が浅川扇状地より勾配があったためと流下する水量の差により、駒沢川右岸には前述した太郎堰のように浅川からの取水した堰が張り巡らされている特色があり（２図）、字境図をみると字名に「田」の付されたものが多く見受けられ古くから水田可耕地として地目利用されてきたことを窺わせる（４図）。ちなみに駒沢川左岸の引水は駒沢川によっている。この扇状地堆積層の緩斜面と北の福岡―西条地籍間の山麓は、標高440mで境している。

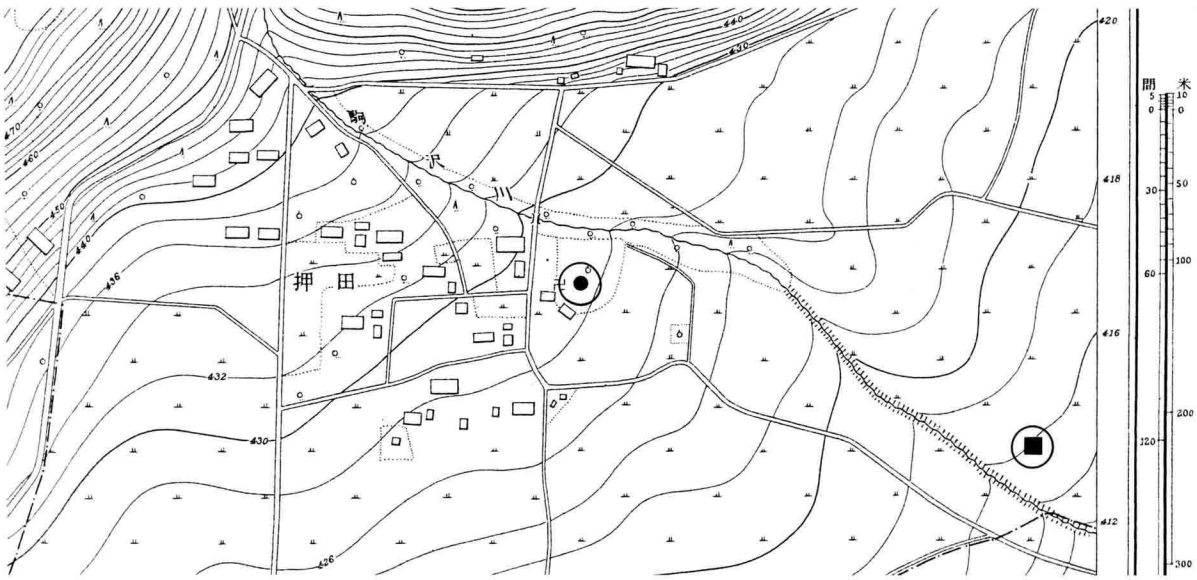
調査地は駒沢川の右岸に位置し、標高430mから428mの東向き緩斜面に展開しており、駒沢川に沿った微高地上に位置している。近接して対岸下流域には平安時代の浅川西条遺跡の集落跡が発掘調査されており、やはり左岸の同様な地形上に展開している（３図）。



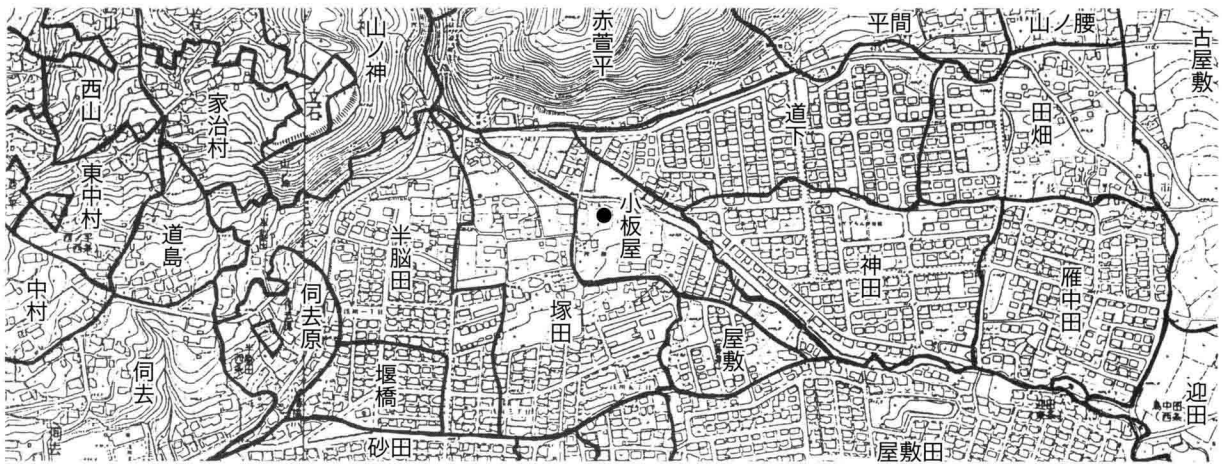

１図　調査地位置図（1：50,000）




2図　駒沢川・浅川扇状地と河川・堰図　(1:20,000)




3図　調査地と浅川西条遺跡(右下) 地形図 (1:5,000, 大正15年測量・昭和27年修正)




4図　調査地周辺の字境図 (1:10,000)

# 第２節　考古学的環境

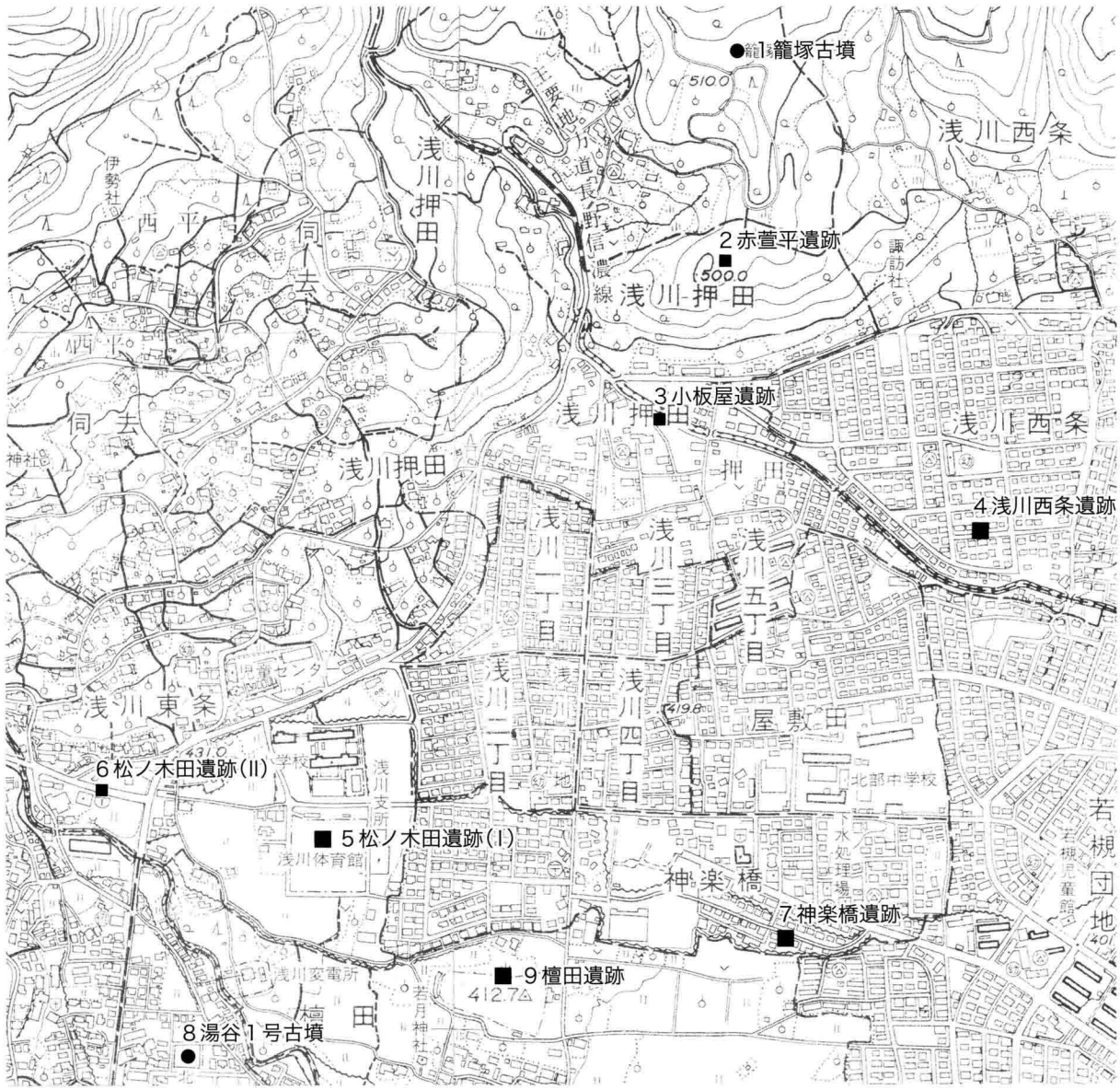
近隣に所在する扇状地扇頂部を代表する遺跡を記載する（５図）。

１　**籠塚（こもりづか）古墳**　直径約22m･高約6.5m規模の円墳である。主体部は横穴式石室で、羽子板状の形態になる。玄室の規模は奥壁幅2.75m・長さ4.54m・高さ2.12mで、羨道部は幅1.65m・残存長1.97mである。立地や規模、主体部の構造などから長野市北部山麓の古墳群中盟主的位置を占める古墳である。昭和53年に長野市史跡に指定されている。

米山一政「籠塚古墳」『新訂長野市の文化財』長野市教育委員会　平成３年

２　**赤萱平（あかかやだいら）Ａ遺跡**　縄文時代前期初頭形式・諸磯ａ式の土器、石鏃・打製石斧・石匙・磨製石斧等が出土している・

『長野県史考古資料編』全１巻(1)遺跡地名表　長野県史刊行会　昭和56年




５図　調査地周辺の主要遺跡分布図（1：10,000）

3　**小板屋（こいたや）遺跡**　今回の発掘調査対象遺跡で、試掘調査により確認された新発見の遺跡である。

4　**浅川西条遺跡**　昭和50年に長野県住宅供給公社による宅地造成工事に先立ち発掘調査がされた。平安時代中期から後期にかけての住居址21軒・井戸址１基・溝址１基を検出した。出土遺物には土師器・須恵器のほかに灰釉陶器・緑釉陶器が比較的多い。特記遺物として15号住居址より網代地草鳥鏡と縄文時代の石棒、17号住居址から紹聖元寶などがある。

長野市の埋蔵文化財第２集『浅川西条遺跡』長野市教育委員会他　昭和51年

5　**浅川扇状地遺跡群松ノ木田遺跡（Ⅰ）**　平成６年に長野高等学校第二グランド造成事業に先立ち発掘調査された。諸磯ｂ式期主体とする縄文時代前期後半と中期後半の加曽利Ｅ式期の遺構・遺物が検出されている。前者は住居址17軒・土坑19基・多くの小穴などの遺構とそれに伴う多量の土器、石鏃や石錐等の石器類、滑石製耳飾・垂玉などの装飾品および未製品が出土している。後者は住居址１軒・敷石住居址１軒・土坑11基・小穴などの遺構を検出し、少量の土器・打製石斧・石棒・土偶を得ている。遺跡は浅川扇状地扇頂部に位置し、左岸に帯状に展開している遺跡と考えられ、調査地はその東端付近にあたる。

長野市の埋蔵文化財第77集『浅川扇状地遺跡群松ノ木田遺跡』長野市教育委員会　平成８年

6　**浅川扇状地遺跡群松ノ木田遺跡（Ⅱ）**　平成７年に飯綱高原浅川線道路改良事業に先立ち発掘調査された。調査地は松ノ木田遺跡の西端に位置し、浅川の扇状地への出口にあたる。縄文時代後期の住居址２軒・集石遺構２基・土坑81基・小穴多数が検出されている。遺物は土器の他打製石斧・磨製石斧・石剣などが出土している。調査地の東側で住居址や集石が、西側で土坑が集中して確認された。前記したⅠ地点と時期の異なる遺構・遺物が検出されるなど松ノ木田遺跡の複雑な様相を垣間みせている。

長野市の埋蔵文化財第82集『浅川扇状地遺跡群松ノ木田遺跡Ⅱ』長野市教育委員会　平成９年

7　**神楽橋（かぐらばし）遺跡**　昭和51年に長野県住宅供給公社による宅地造成事業に先立ち日本窯業史研究所（国士舘大学）により発掘調査が実施された。中心遺構は弥生時代中期の栗林式期の集落跡と聞いている。発掘調査に先立つ試掘調査では、後期の箱清水式期の土坑から完形の高坏・壷・甕が出土した。

8　**湯谷（ゆや）古墳群**　昭和49年に湯谷東土地区画整理事業に伴い発掘調査を実施した。調査の動機は工事用車両搬入路を造成中古墳らしきものがあるとの通報によるもので、現地に赴き踏査したところ、事業地内に７基の円墳の存在を確認した。墳丘が認められるもの１基（１号）、石室の一部が確認されるもの２基（２・３号）・壊滅したもの２基（４～７号）であった。この内今後破壊が予定される１・３号古墳を発掘調査した。１号古墳は最上流域に存在し、古墳群中最も大きく直径11.5m・墳高2.3mの規模である。主体部は片袖形の横穴式石室で、全長9.3m・玄室長5.1m・最大幅1.45m・玄門幅1.2mを測る。遺物は土師器や須恵器の土器類のほとんどが前庭部より出土しており、石室からは鉄鏃・直刀および銀象嵌された円頭柄頭・６角窓透かしの鍔などの武器類、轡・鉄鎖・鉸具・帯金具などの馬具、耳環・勾玉・ガラス小玉などの装飾品が出土している。６世紀後葉に造営され７世紀代を通じて追葬が行われていたと考えられる。３号古墳は玄室下部のみ残存していた。出土遺物には鉄鏃・耳環・勾玉・管玉・臼玉・ガラス小玉がある。１号古墳より後築のものである。

長野市の埋蔵文化財第10集『湯谷古墳群　長礼山古墳群　駒沢新町遺跡』長野市教育委員会他　昭和56年

9　**浅川扇状地遺跡群檀田（まゆみだ）遺跡**　平成２年に北長野ゴルフセンター建設に先立ち発掘調査を実施した。調査対象地はフェンス支柱部分16箇所で、面積は約360㎡である。調査の結果、住居址11軒・土坑14基・溝址３条・小穴多数を検出した。遺構の時期は平安時代のものが主体を占めるが、遺構外出土遺物に縄文時代・弥生時代・古墳時代のものがあり、この遺跡の複雑な性格や規模の大きさをうかがわせる。

長野市の埋蔵文化財第41集『中俣遺跡　押鐘遺跡　檀田遺跡』長野市教育委員会　平成３年

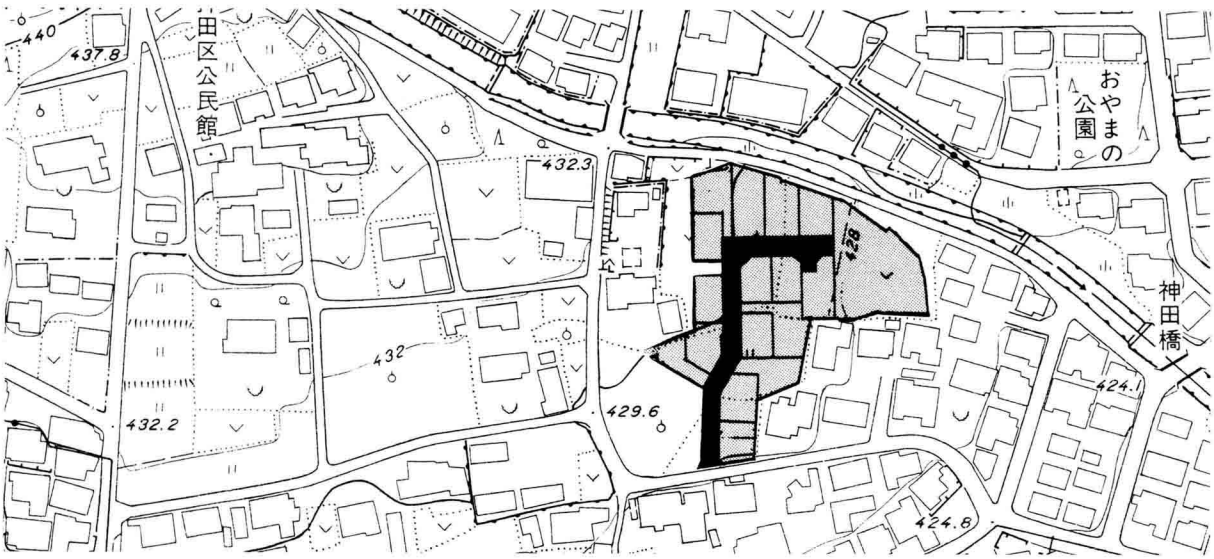
# 第Ⅲ章　遺構と遺物

## 第１節　遺構の分布

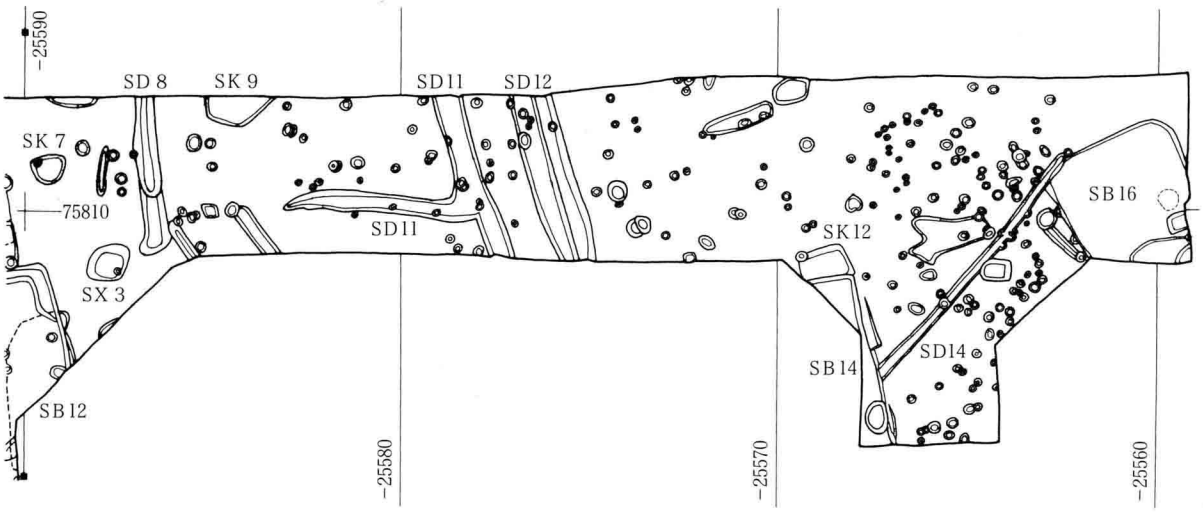
調査対象地は道路敷きということで、東西約60m・Ｌ字形に北に屈曲して約30mのトレンチ状のものである（６図）。そのため遺跡の全容を把握するというよりも、遺構の分布状態や時代･遺構の種類等確認する調査にならざるをえなかった。

遺構分布の状況と遺構の位置の説明上、調査区を便宜的に３区に大別した。南北の座標値75780から東側をＡ区、西側をＢ区とする。さらに北に屈曲する部位（東西座標値－25590以北）をＣ区とする。

住居址はＡ区とＢ区に集中する傾向にみられるが、全体的に散在する在り方を示している。ただし、調査では16軒の番号を付したが、中には遺構の一部分の検出であり、形態的に疑問視せざるを得ないものあるので集落の展開の状況は今後の調査を待って結論を出す必要があろう。土坑は小穴よりも大型の遺構および変形態の掘り込



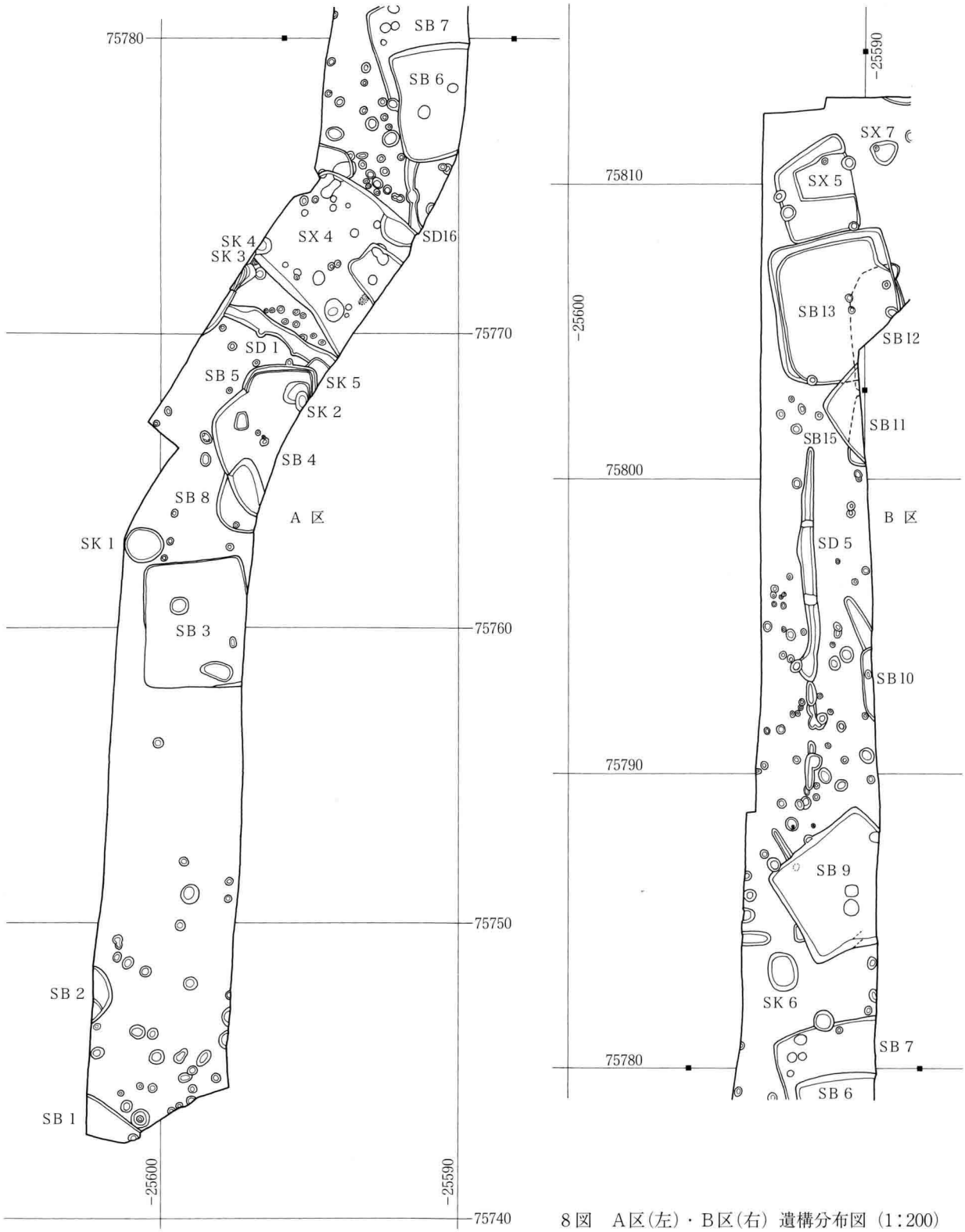

６図　開発区域と調査地（1:2,500）




７図　Ｃ区遺構分布図（1:200）

みを抽出して14基に番号を付した。A区の西半分からC区に散在的に認められる。溝址は土坑同様の分布状態を示しており、大小規模のもの17条に番号を付した。小穴は柱穴を想定されるもので、濃淡の差はあるものの調査地全体から検出されている。

ちなみに、次節では調査時における遺構番号のものでも性格が遺構名称の内容が近似していると思われるものは、その項目で記載した。




8図　A区(左)・B区(右) 遺構分布図 (1:200)

# 第２節　遺構と遺物

## １　住居址（ＳＢ）

**１号住居址**［遺構］（８図）Ａ区の東端に位置する。調査では北壁側の一部分を確認したにすぎず、形態･規模等は不明である。検出面からの壁高は15㎝を測る。床面は平坦で軟弱である。

［遺物］平安時代の土器片が少量出土しているにすぎず、図上復元可能な大きさの破片は認められない。

**２号住居址**［遺構］（８図）１号住居址の西側に近接して確認された遺構であるが、検出した部位は東側の一部分にすぎない。そのため居住施設であるかどうかを含めて、形態・規模等は不明である。ただし、壁の湾曲から形態は隅丸方形になる可能性もある。検出面からの壁高は18㎝測り、床面は平坦で軟弱である。

［遺物］平安時代の土器片が少量出土しているにすぎず、図上復元可能な大きさの破片は認められない。

**３号住居址**［遺構］（９図）Ａ区の中央付近に位置し、南東隅付近を除きほぼ全形を露呈した。形態は長方形を呈し、長軸（南北軸）4.4m・短軸3.45m・壁高（壁の最深値）10㎝の規模になる。主軸方向はほぼ南北を指す。床面は平坦で軟弱であり、南・東に傾斜を有する。カマドは東壁の右寄りに構築されたと思われ、形態を残さないほど破壊されて直径20㎝ほどの火床のみが確認された。南東隅付近に長軸1.15m・短軸0.7m・深さ11㎝の楕円形を呈する土坑状掘り込みがみられた。北壁側の円形土坑は本遺構より後出の遺構である。

［遺物］（12図）土器の出土量は他の遺跡に比較すると多いといえないが、今回検出した遺構の中では４号住居址に次いで多い。器種には土師器坏（１～４）・椀（６）・甕（７～９）、黒色土器坏（５）がある。坏・椀はロクロ成形で、底部に糸切り痕がある。２と５の内面はヘラミガキ調整で、５には黒色処理が施される。甕の調整は口縁部から体部上半にかけてロクロによっているが、７・８の体部下半はタテヘラケズリ調整である。９の体部下半はタタキ調整でタタキメが残る。

**４号住居址**［遺構］（10図）３号住居址の西に位置する。遺構の東側で８号住居址、西側で５号住居址･２号土坑と重複関係にあり、２号土坑に次いで新しい遺構との所見を得た。調査では住居址の西側半分ほどを検出したにすぎない。また、調査は西側の重複遺構と同時進行で行ってしまったため北壁を確認していない。形態は南壁の湾曲度から胴張りの隅丸長方形になるものと思われる。規模等は不明であるが、検出面から西壁の壁高は32㎝を測る。西壁の方向はＮ20°Ｗである。床面は軟弱で凹凸がある。北東隅に短軸１m･深さ38㎝を測る楕円形を呈し、底面が鍋底状の土坑や床面に散在する小穴がみられる。調査範囲からはカマドの痕跡は認められない。

［遺物］（12図）遺物の出土量は多い。図示した器種には土師器坏（10～15）･羽釜（22）、黒色土器坏（16･17）・椀（18～20）、灰釉陶器椀（21）がある。坏･椀類はロクロによる成形で、黒色土器の内面はヘラミガキが施される。20は内外面共に黒色処理される。また、土師器坏は３号住居址のものより小型である。羽釜は口縁部から体部上半がロクロによる調整で、体部下半にはタタキメが残る。鍔は全周し、ヨコナデで整形される。灰釉陶器の高台は三日月高台であるが、外面の稜は不明瞭であり、内面は内湾する。

**５号住居址**［遺構］（10図）４号住居址と重複し、東側半分ほどが調査区域外にあるため調査では北西隅部を検出したにすぎない。そのため規模等は不明であるが、検出した壁の掘り込み状態から形態は胴張りの隅丸方形を呈するものと思われる。北壁の方向はほぼ東西である。南壁の深さは32㎝で、床面は平坦で軟弱である。壁下には周溝が巡る。調査範囲からはカマドの痕跡は認められない

［遺物］平安時代の土器片が少量出土しているにすぎず、図上復元可能な大きさの破片は認められない。

**６号住居址**［遺構］（９図）Ａ区とＢ区の接点上に位置する。調査では遺構のほぼ西側半分を検出したが、北側で

7号住居址と重複関係にある。形態は長方形を呈し、南北軸3.9m・壁高（南壁の最深値）16cmの規模になる。東西軸の規模は不明である。長軸の方向はN14°Wである。床面は南と東に傾斜を有し、軟弱である。カマドは確認されないが、北西隅付近からは薄い炭化物の集積がみられた。床面より浮いた状態で大石の散在していたが、住居廃絶後投棄されたものであろう。

［遺物］（12図）露呈した面積の割には土器の出土量は少なく、図示できるものは土師器坏（23）と灰釉陶器椀（24）の2個体にすぎない。23はロクロ成形で、底部に糸切り痕を残す。24の高台外面の稜は不明瞭である。

**7号住居址**［遺構］（9図）6号住居址と重複し、東側が調査区域外に延びているため規模等は不明である。形態は長方形を呈するものと思われる。北壁の掘り込みは8cmと浅く、床面は南・東に傾斜し軟弱である。

［遺物］平安時代の土器片が少量出土しているにすぎず、図上復元可能な大きさの破片は認められない。

**8号住居址**　性格不明遺構の項で記述する。

**9号住居址**［遺構］（9図）B区の東側に位置し、7号住居址に近接している。調査では南東隅部を除き全体の4分の3ほどを検出した。形態は南壁が外開するものの基本的に方形を呈するものと思われる。主軸方向はN32°Wを指し、主軸3.6m・対軸4.1m・壁高（北壁の最深値）30cmの規模である。床面は平坦で、中央付近は堅緻な面が認められた。カマドは北壁左寄りに構築されていたが、破壊され火床焼土が残存していた。壁外に1.1mほど煙道が設けられている。床面より浮いた状態で大石の散在していたが、住居廃絶後投棄されたものであろう。

［遺物］（13図）検出面積およびカマド付近の調査にかかわらず土器の出土量は少ない。図示した器種は黒色土器坏（31・32）、須恵器坏（33・34）、土師器甕（35～37）である。坏と小型の甕（35）はロクロによる成形で、底部に糸切り痕を残す。黒色土器の内面はヘラミガキが施される。大型の甕の外面はロクロ調整痕、内面にはハケナデ調整痕が残る。

**10号住居址**［遺構］（8図）B区の中央付近に位置し、調査では西壁部を検出したにすぎない。形態は隅丸方形を呈するものと思われるが、規模等は不明である。検出面からの壁高は17cmである。西壁の方向はN2°Eを指す。

［遺物］（12図）土器片が数点出土しているにすぎない。図示できる土器片は土師器坏（25）の1個体である。

**11号住居址**［遺構］（8図）B区の西側に位置し、15号住居址と重複関係にあり、これよりも新しい。調査では西壁と南壁の一部分を確認したにすぎない。そのため形態は方形を呈するものと思われるが規模等は不明である。検出面からの壁高は45cm測る。西壁の方向はN10°Eを指す。

［遺物］平安時代の土器片が数点出土しているにすぎない。

**12号住居址**　性格不明遺構の項で記述する。

**13号住居址**［遺構］（11図）B区の西側に位置し、12号・15号住居址と重複関係にある。そのため東壁と南壁の一部が12号住居址により切り取られているもののほぼ全容を確認した。形態は長方形を呈するが住居が南壁を除き各方向に拡張されたと思われ、10～30cmのベット状の段差が認められた。規模は長軸（南北軸）4.95m・短軸4.2m・壁高（西壁の最深値）33cmを測り、長軸方向はN21°Wを指す。床面は南北方向で若干窪むが、中央付近は堅緻な面がみられた。調査範囲内ではカマドの痕跡は認められない。未調査の東壁の右寄りに構築されているものと思われる。床面より浮いた状態で大石が散在していた。

［遺物］（13図）出土土器は少なく、図上復元可能なものは坏と椀類だけである。器種には土師器坏（38・39）、黒色土器坏（40・41）・椀（42）、灰釉陶器椀（43）がある。すべてロクロによる成形で、底部に糸切り痕を残す。黒色土器の内面はヘラミガキが施される。

**14号住居址**［遺構］（9図）C区の東側に位置し、北壁で12号土坑と重複する。調査では東壁側の一部を確認したにすぎない。形態は長方形を呈するものと思われるが、規模等は不明である。壁高は43cmを測る。東壁の方向は

N15°Wを指す。

［遺物］（13図）平安時代の土器片が数点出土しているにすぎず、器種には土師器坏（29）と椀（30）がある。

**15号住居址**［遺構］（10図）B区西側の遺構群のひとつで、11号・12号・13号住居址と重複関係にあり、この内最も古い遺構と思われる。調査では南西隅部を確認したにすぎない。形態は壁に胴張りの傾向が認められることから隅丸方形を呈するものと思われる。規模等は不明である。掘り込みは40cmである。

［遺物］平安時代の土器片が数点出土しているにすぎない。

**16号住居址**［遺構］（10図）C区の東端に位置し、遺構の南半分ほどは調査区外にある。形態は隅丸方形を呈するものと思われ、規模は南北軸不明・東西軸3.65m・壁高（西壁の最深値）43cmである。主軸方向はN58°Eである。床面は平坦で軟弱であるが、南側に土坑状の落ち込みがみられた。カマドは東壁の中央付近に構築されていたものと思われ、直径50cmほどの火床焼土が残存していた。その右側に深さ10cmの貯蔵穴と思われる土坑がみられる。

［遺物］（13図）土器の出土量は少なく、図上復元の可能なものは須恵器坏（44）、土師器甕（45）があるにすぎない。坏の底部には糸切り痕が残り、甕の調整はロクロによっている。

## 2　性格不明遺構（SX）

**8号住居址**［遺構］（10図）4号住居址と重複し、東側が調査区域外に延びているため南西隅付近を検出したにすぎない。そのため規模等は不明であり、形態も胴張りの隅丸方形推定するが調査範囲では円形状になり定かでない。南壁の深さ10cmに対して北壁では25cmほどになり、調査段階で住居址としたが居住施設としては疑わしい。

［遺物］平安時代の土器片が少量出土しているにすぎず、図上復元可能な大きさの破片は認められない。

**12号住居址**［遺構］（9図）B区の西側に位置し、13号・15号住居址と重複関係にあり、これらよりも新しい遺構である。当初、西壁の状況から住居址として調査をすすめたが、結果的に変形な長方形を呈する遺構と判明した。長軸（南北軸）4.0m・短軸1.9m・壁高（北壁の最深値）7cmを測る規模である。

［遺物］（12図）土器の出土量は少なく、図上復元可能な土器片は土師器坏（26・27）、黒色土器椀（28）があるにすぎない。共にロクロ成形で、底部に糸切り痕をのこす。椀の内面はヘラミガキが施され、黒色処理される。

**3号性格不明遺構**［遺構］（11図）B区とC区の接点付近に位置する土坑状の遺構である。変形の楕円形を呈し、長軸（東西軸）1.18m・短軸0.96m・深さ35cmの規模である。覆土上面には川原石の集石が見られた。

［遺物］（13図）ほぼ完形に近い土師器坏（52）が1個体出土している。

**4号性格不明遺構**［遺構］（11図）A区の北側に位置し、5号住居址と6号住居址に東西で隣接する。性格不明遺構として調査を進めたが、北壁と南壁が平行関係にあることから、居住施設とも考えられる。形態は隅丸長方形を呈するものと思われる。規模は長軸（東西軸）は不明であるが、短軸は4.4m・壁高（西壁の最深値）40cmを測る。長軸方向はN54°Wである。床面は南・東に傾斜し、東側には浅い土坑状の掘り込みがあり、西側の円形土坑から中央の長方形状土坑にかけて河原石による石列を検出したが、性格は不明である。また、床面には小穴が散在しているが小屋組み配置の柱穴にはならない。

［遺物］（13図）出土土器は少なく、図上復元可能なものは坏と椀類だけである。器種は黒色土器坏（46）、須恵器坏（47～49）・高台坏（50・51）である。共にロクロによる成形で、46を除き底部に糸切り痕を残す。46の内面はヘラミガキガ施され黒色処理される。47には墨書がみられる。

**5号性格不明遺構**［遺構］（11図）B区北端に位置し、13号住居址に接する。溝状でコの字状の台形を呈する。東側2.35m・西側2.5m・北側3.3m・南側2.5mの規模で、溝幅は0.4～1.4m・深さ16cmを測る。

［遺物］平安時代の土器片が数点出土しているにすぎない。

## 3　土　坑（ＳＫ）

**１号土坑**［遺構］（11図）Ａ区の３号住居址に隣接している。円に近い形態で、長軸1.35m・短軸1.2m・深さ８cmの規模である。底面は平坦である。

［遺物］平安時代の土器片が数点出土しているにすぎない。

**２号土坑**［遺構］（10図）４号住居址と５号住居址と重複関係にあり、これらよりも新しい遺構である。形態は不整な隅丸長方形に円形の掘り込みが付加する。長軸の規模は不明で、短軸0.8mをはかる。検出面から深さは65cmである。底面には凹凸がみられる。

［遺物］この遺構を確認してから出土した土器片はない。

**６号土坑**［遺構］（11図）Ａ区の９号住居址の東に近接して掘り込まれている。形態は円に近い楕円形を呈し、長軸（南北軸）1.2m・短軸1.1m・深さ18cmの規模である。

［遺物］（13図）平安時代の土器片が数点出土しているにすぎず、器種には土師器坏（53）がある。

**７号土坑**［遺構］（11図）Ｂ区とＣ区の接点付近に位置する。形態は隅丸三角形状を呈し、長軸（南北軸）0.96m・短軸0.8m・深さ17cmの規模である。内部には角礫と土器片が認められた。

［遺物］（13図）角礫の間から土師器甕（54･55）が出土している。ロクロ調整で、54の体部外面はタテヘラケズリが施され、内面にはハケメが残る。

## 4　溝　址（ＳＤ）

［遺構］（７・８図）溝状をなすもの14条の遺構に番号を付したが、そのほとんどが浅い掘りこみで、両端または片方が調査区内で終結がみられる。また、本来の水路としての機能が認められなく、区画溝としての性格も有していないものと思える。性格不明遺構といわざるをえない。ただし、11号と12号溝址は並行して掘り込まれており、他のものより規模的に大型のものであることから水路機能を有していた可能性がある。

［遺物］平安時代の土器片が数点出土しているが、図示できるものはない。

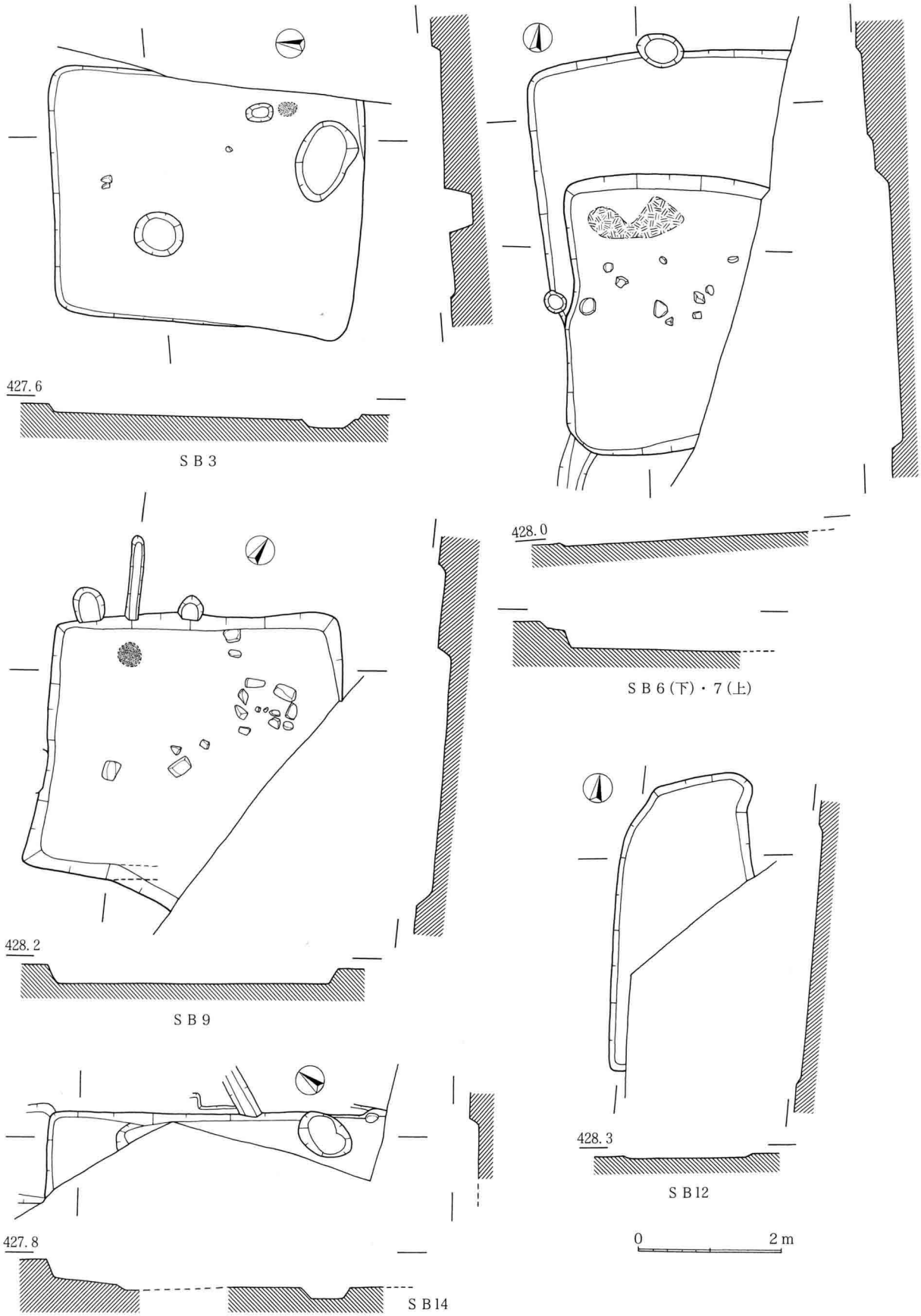
## 5　小　穴（ＳＰ）

［遺構］（７・８図）密集度に濃淡があるが、調査区全体にみとめられる。直径20～30cm代のものが多いが。深さにばらつきがみられ、企画性のある柱列または小屋組み配列をなすものは抽出されない。これらの中には平安時代の土器片を出土するものがあり、当該期の所産と考えられるが、住居址遺構の上面から確認されているものも多くあることから後出の遺構かもしれない。

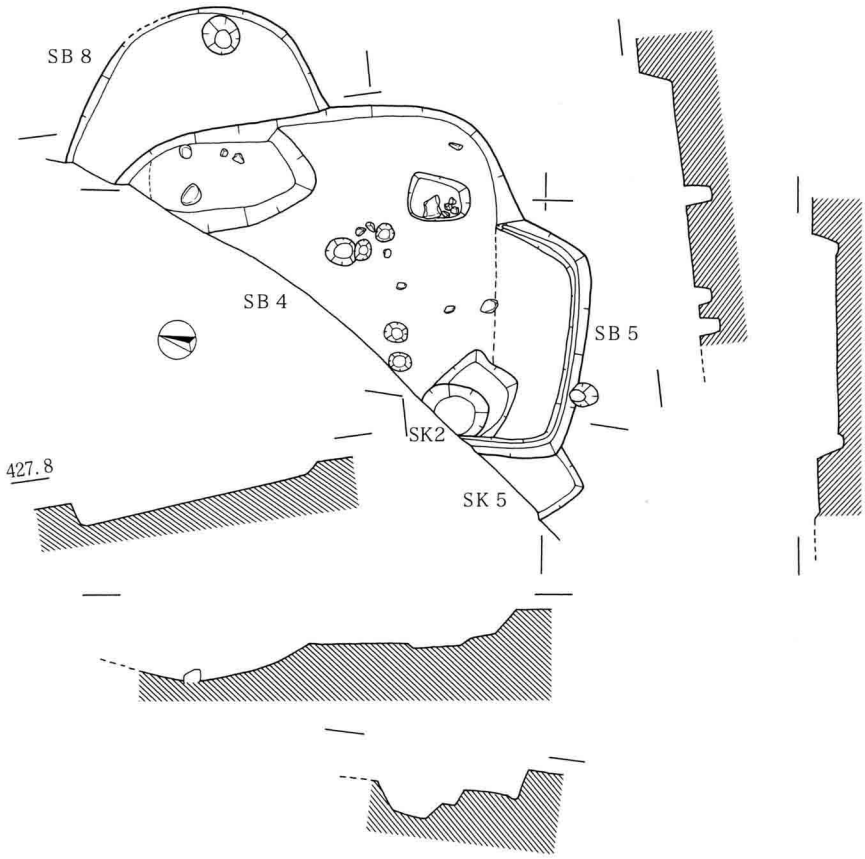
［遺物］平安時代の土器片が数点出土しているが、図示できるものはない。

## 6　検出面の遺物

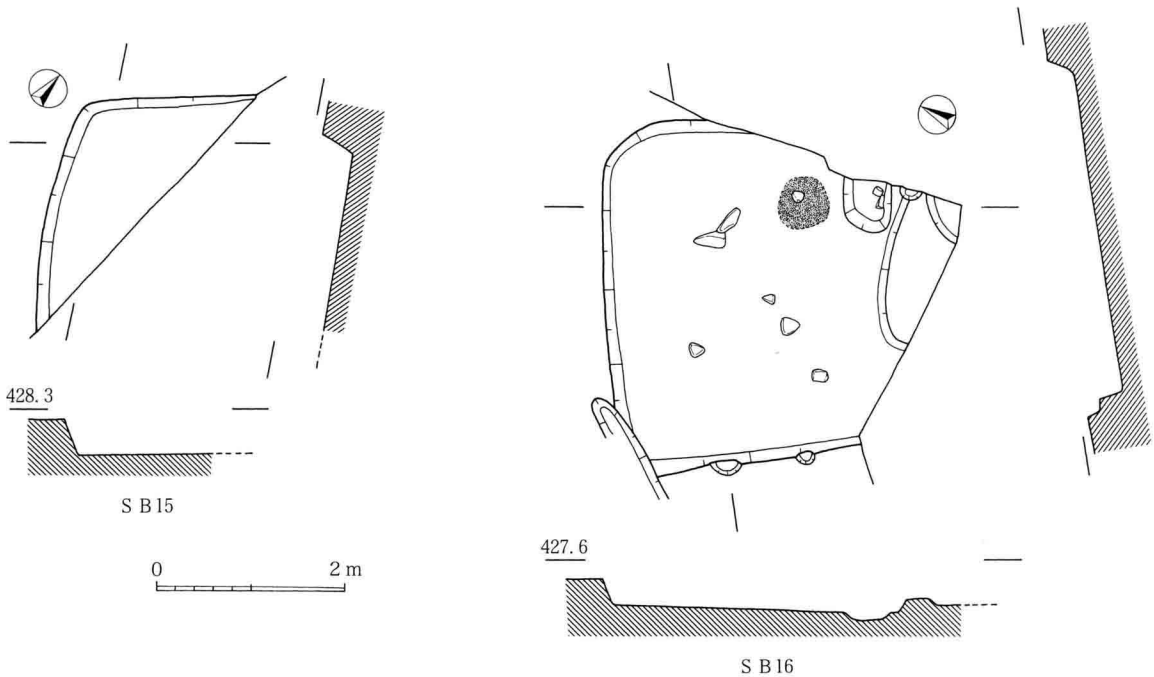
［遺物］（13図）表土除去作業や遺構の形態追及作業で出土した土器片で、その採集量は少ない。図示した遺物は平安時代の土師器坏（56･57）、灰釉陶器皿（58）、須恵器台付壷（59）・四耳壷（60）および中世に比定される龍泉窯系青磁椀（61）である。



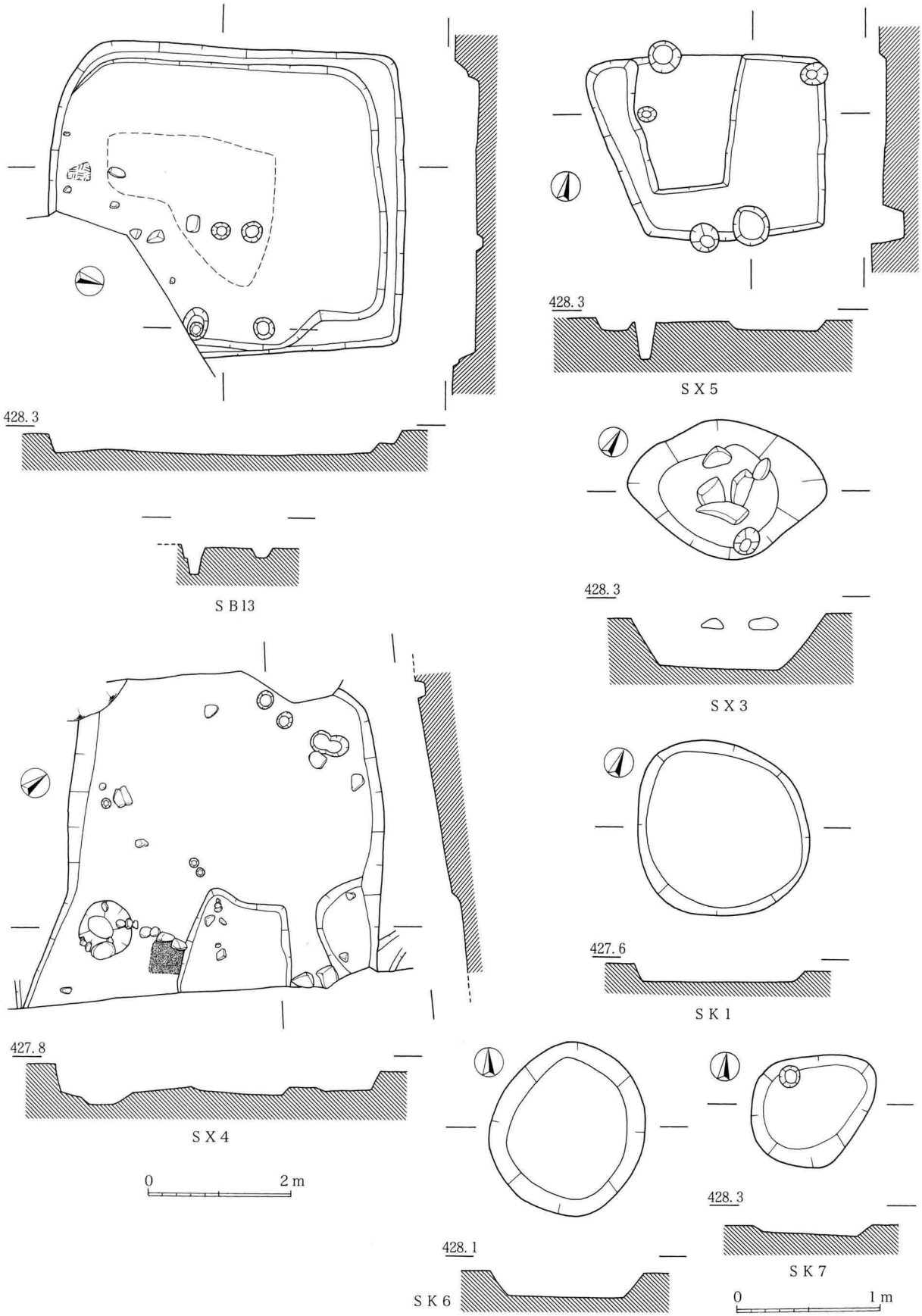

9図　SB3・6・7・9・12・14実測図（1:80）



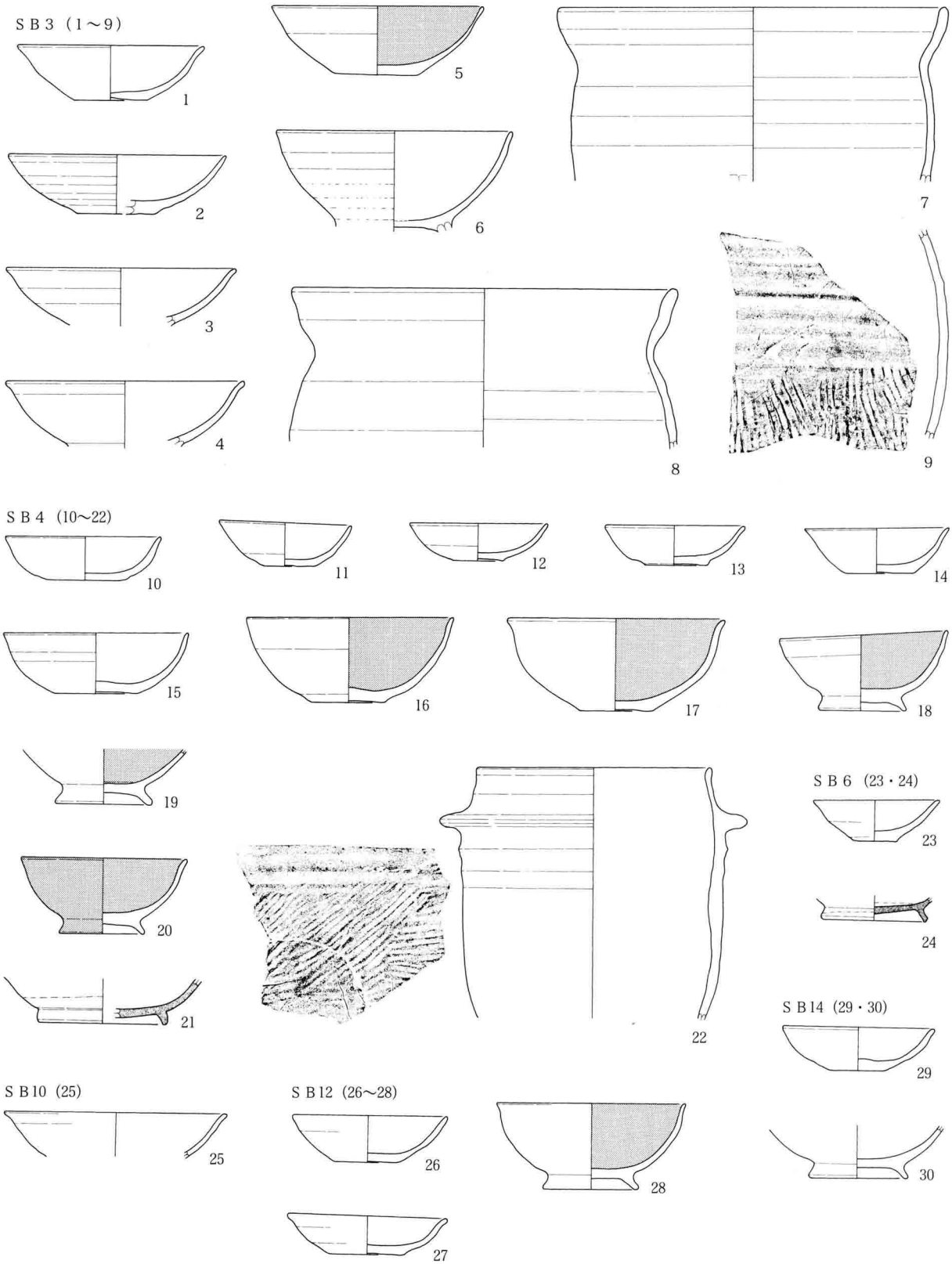

ＳＢ４・５・８、ＳＫ２・５



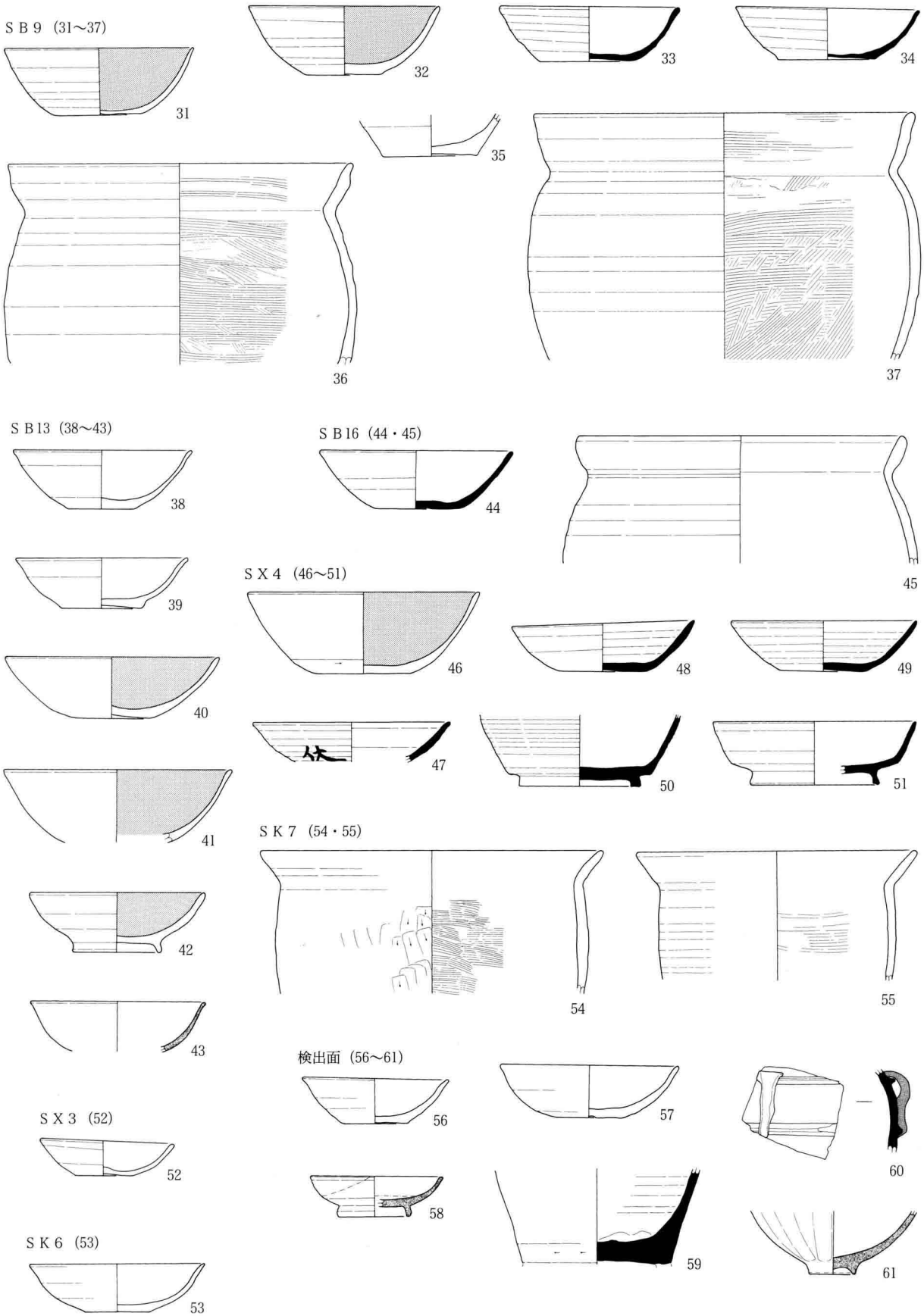

10図　ＳＢ４・５・８・15・16、ＳＫ２・５実測図（1:80）




11図　ＳＢ13、ＳＸ３～５、ＳＫ１・６・７実測図（1:80、ＳＸ３およびＳＫは1:40）




12図　ＳＢ３・４・６・10・12・14出土土器実測図（1:4）



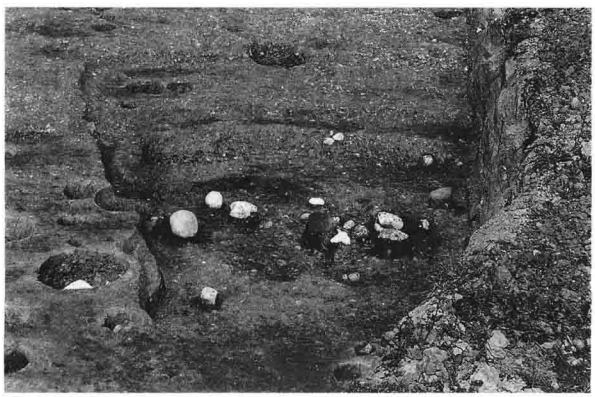

13図　ＳＢ９・13・16、ＳＸ３・４、ＳＫ６・７検出面出土土器実測図（1:4）

土器観察表

| 番号 | 種別 | 器種 | 法量(cm) | | | 遺存 | 備考 | 番号 | 種別 | 器種 | 法量(cm) | | | 遺存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | |
| 1 | 土師 | 坏 | 12.6 | 5.0 | 3.7 | 1/2 | SB3 | 32 | 黒色 | 坏 | 13.4 | 5.6 | 4.8 | 3/4 | SB9 |
| 2 | 〃 | 〃 | 14.6 | 5.6 | 4.0 | 1/4 | 〃 | 33 | 須恵 | 〃 | 12.7 | 6.7 | 3.8 | 2/3 | 〃 ・軟質 |
| 3 | 〃 | 〃 | 15.4 | | | 1/3 | 〃 | 34 | 〃 | 〃 | 13.4 | 6.8 | 3.6 | 完形 | 〃 ・ 〃 |
| 4 | 〃 | 〃 | 15.8 | | | 1/2 | 〃 | 35 | 土師 | 甕 | | 6.7 | | ママ | 〃 |
| 5 | 黒色 | | 14.2 | 5.8 | 4.7 | 〃 | 〃 | 36 | 〃 | 〃 | 24.2 | | | 1/4 | 〃 |
| 6 | 土師 | 椀 | 15.8 | | | 1/3 | 〃 | 37 | 〃 | 〃 | 26.6 | | | 1/5 | 〃 |
| 7 | 〃 | 甕 | 26.0 | | | 1/4 | 〃 | 38 | 〃 | 坏 | 12.4 | 4.6 | 4.1 | 1/4 | SB13 |
| 8 | 〃 | 〃 | 25.6 | | | 1/6 | 〃 | 39 | 〃 | 〃 | 12.0 | 5.8 | 3.7 | 1/2 | 〃 |
| 9 | 〃 | 〃 | | | | ママ | 〃 ・タタキメ | 40 | 黒色 | 〃 | 15.0 | 5.8 | 4.3 | 3/5 | 〃 |
| 10 | 〃 | 坏 | 10.6 | 4.8 | 3.0 | 1/4 | SB4 | 41 | 〃 | 〃 | 16.0 | | | 1/3 | 〃 |
| 11 | 〃 | 〃 | 9.0 | 3.8 | 3.0 | 完形 | 〃 | 42 | 〃 | 椀 | 12.2 | 6.0 | 4.2 | 1/2 | 〃 |
| 12 | 〃 | 〃 | 9.3 | 3.5 | 2.6 | 〃 | 〃 | 43 | 緑釉 | 〃 | 12.2 | | | ママ | 〃 ・硬質 |
| 13 | 〃 | 〃 | 9.5 | 4.3 | 2.7 | 〃 | 〃 | 44 | 須恵 | 坏 | 13.5 | 6.2 | 4.1 | 3/4 | SB16・軟質 |
| 14 | 〃 | 〃 | 9.9 | 4.6 | 3.1 | 1/2 | 〃 | 45 | 土師 | 甕 | 23.0 | | | 1/3 | 〃 |
| 15 | 〃 | 〃 | 12.6 | 5.7 | 4.1 | 1/3 | 〃 | 46 | 黒色 | 坏 | 16.0 | 6.8 | 5.7 | 1/2 | SX4 |
| 16 | 黒色 | 〃 | 14.0 | 5.0 | 5.8 | 〃 | 〃 | 47 | 須恵 | 〃 | 13.6 | | | 1/4 | 〃 ・軟質・墨書 |
| 17 | 〃 | 〃 | 14.8 | 5.1 | 6.2 | 1/2 | 〃 | 48 | 〃 | 〃 | 12.6 | 6.4 | 3.4 | 完形 | 〃 |
| 18 | 〃 | 椀 | 11.5 | 6.0 | 5.2 | 4/5 | 〃 | 49 | 〃 | 〃 | 12.8 | 6.1 | 3.5 | 3/5 | 〃 ・軟質 |
| 19 | 〃 | 〃 | | 6.5 | | 1/2 | 〃 | 50 | 〃 | 台付坏 | | 8.4 | | 2/3 | 〃 |
| 20 | 〃 | 〃 | 11.3 | 5.8 | 5.1 | 1/4 | 〃 ・両面黒 | 51 | 〃 | 〃 | 14.0 | 8.8 | 4.5 | 1/4 | 〃 |
| 21 | 灰釉 | 〃 | | 8.8 | | 1/2 | 〃 | 52 | 土師 | 坏 | 9.3 | 4.1 | 2.5 | 3/4 | SX3 |
| 22 | 土師 | 羽釜 | 16.0 | | | 1/6 | 〃 ・タタキメ | 53 | 〃 | 〃 | 12.4 | 4.6 | 3.4 | 1/4 | SK6 |
| 23 | 〃 | 坏 | 8.7 | 3.0 | 2.8 | 完形 | SB6 | 54 | 〃 | 甕 | 24.0 | | | 1/6 | SK7 |
| 24 | 灰釉 | 椀 | | 7.3 | | 1/3 | 〃 ・重ね焼痕 | 55 | 〃 | 〃 | 19.6 | | | 〃 | 〃 |
| 25 | 土師 | 坏 | 15.0 | | | 〃 | SB10 | 56 | 〃 | 坏 | 10.3 | 4.8 | 3.1 | 3/4 | 検出面 |
| 26 | 〃 | 〃 | 10.6 | 4.6 | 3.1 | 1/2 | SB12 | 57 | 〃 | 〃 | 12.4 | 5.0 | 3.6 | 1/3 | 〃 |
| 27 | 〃 | 〃 | 10.8 | 5.1 | 2.6 | 〃 | 〃 | 58 | 灰釉 | 皿 | 9.3 | 5.2 | 2.8 | 1/2 | 〃 ・重ね焼痕 |
| 28 | 黒色 | 椀 | 12.7 | 6.4 | 5.8 | 3/4 | 〃 | 59 | 須恵 | 台付壷 | | | | ママ | 〃 |
| 29 | 土師 | 坏 | 10.4 | 3.8 | 2.9 | 完形 | SB14 | 60 | 〃 | 四耳壷 | | | | 1/3 | 〃 |
| 30 | 〃 | 椀 | | 5.7 | | ママ | 〃 | 61 | 青磁 | 碗 | | | 3.3 | 1/3 | 〃 ・蓮弁文 |
| 31 | 黒色 | 坏 | 13.4 | 6.3 | 4.7 | 完形 | SB9 | | | | | | | | |

ＳＢ３

ＳＢ４(右)・５(左)

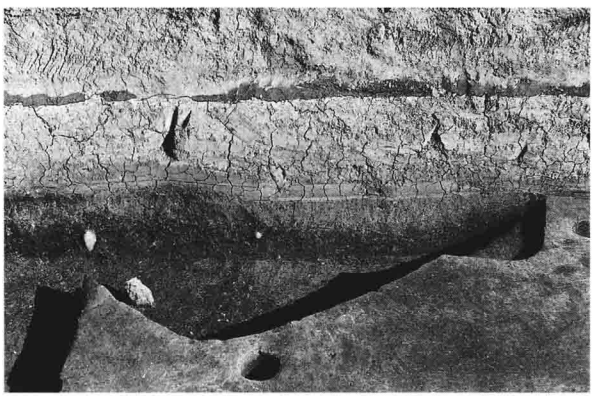


ＳＢ６(下)・７(上)

ＳＢ９

ＳＢ13

ＳＢ14



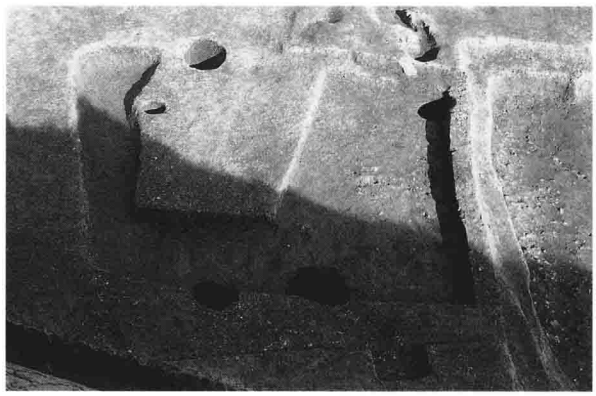
ＳＢ15

ＳＢ16

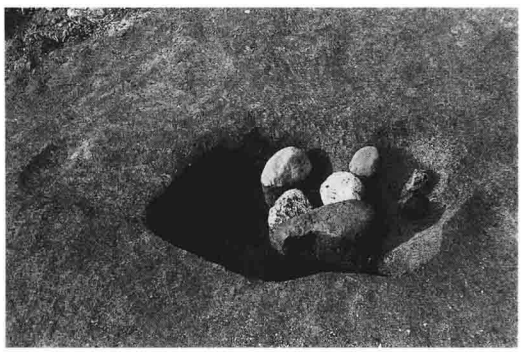
SB 8

SB12

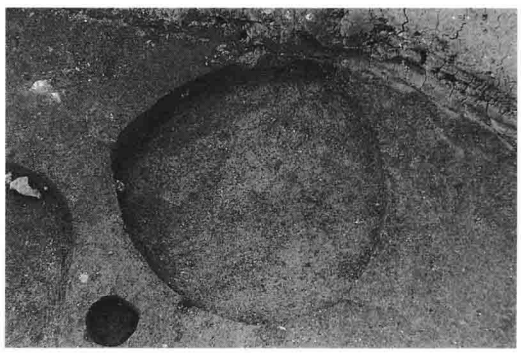
SX 4



SX 5



SX 3

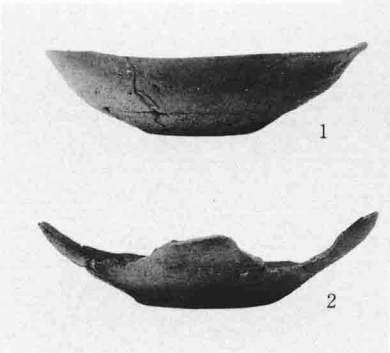


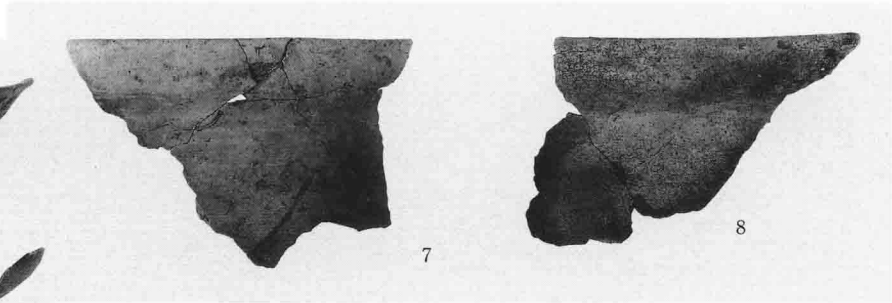
SK 3

SK 6

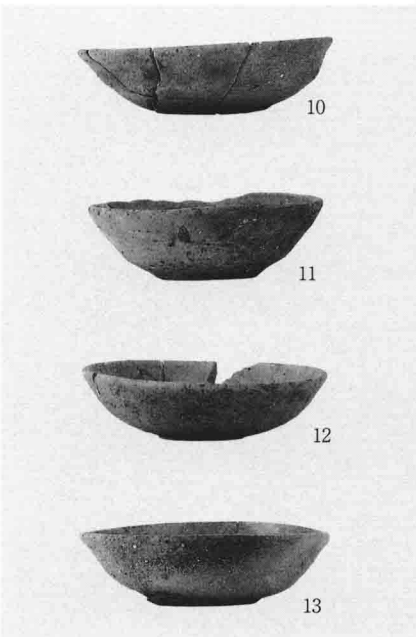
SK 7

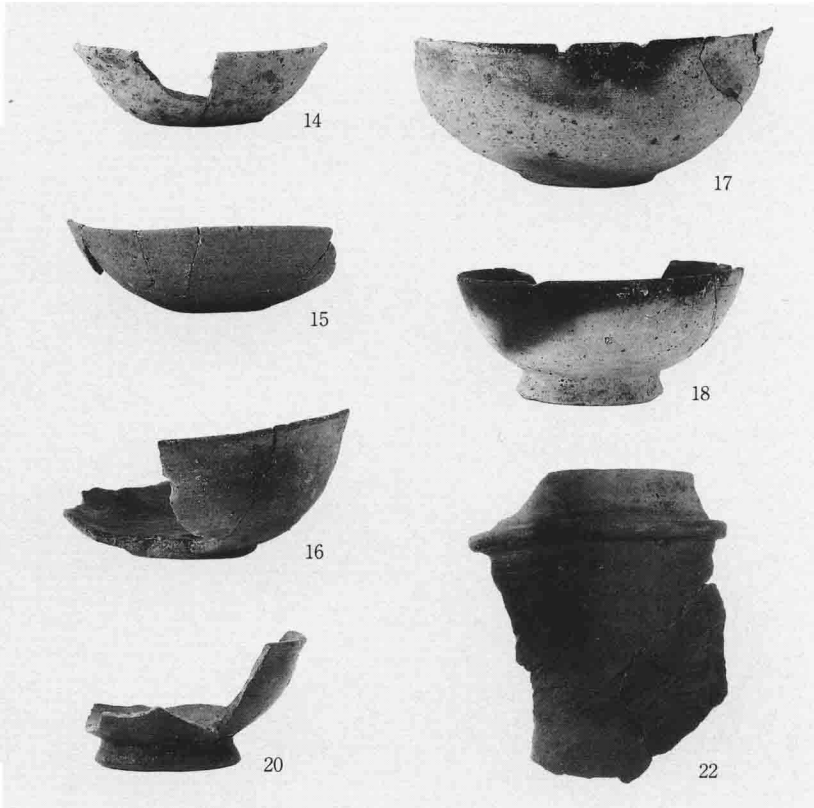
S B 3



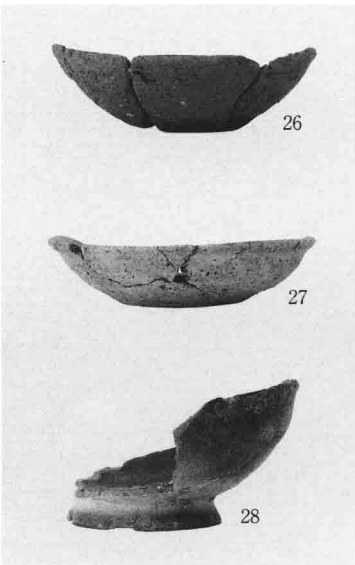

S B 4



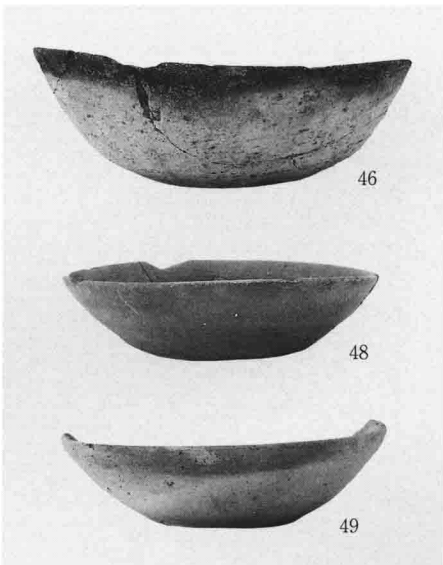




S B 6

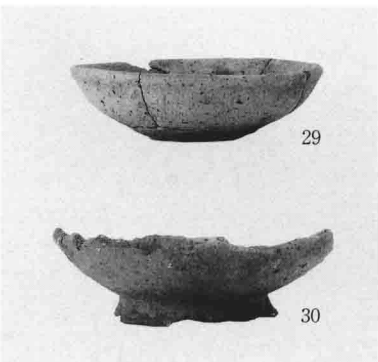
S B 12



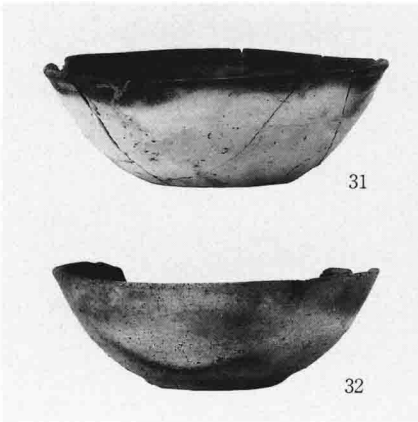

S X 4 (1)

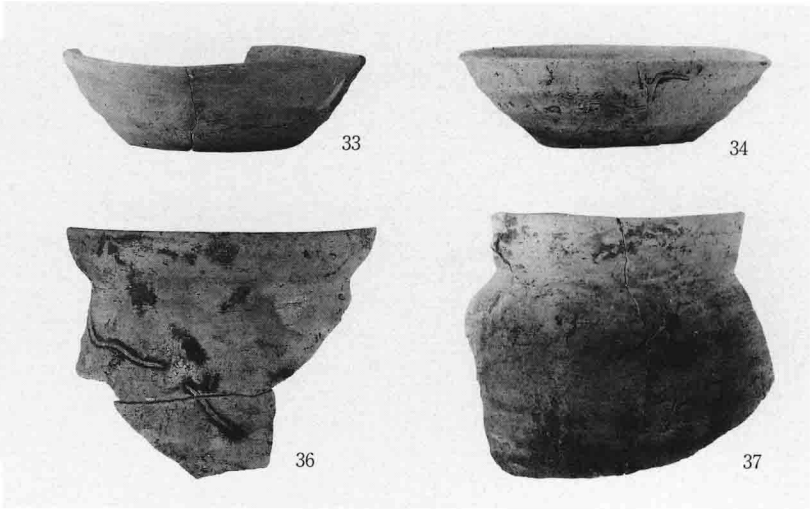



S B 14

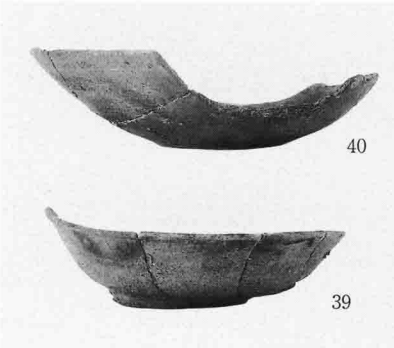


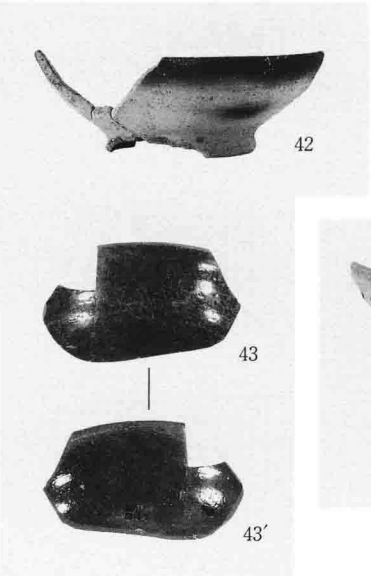
SB9



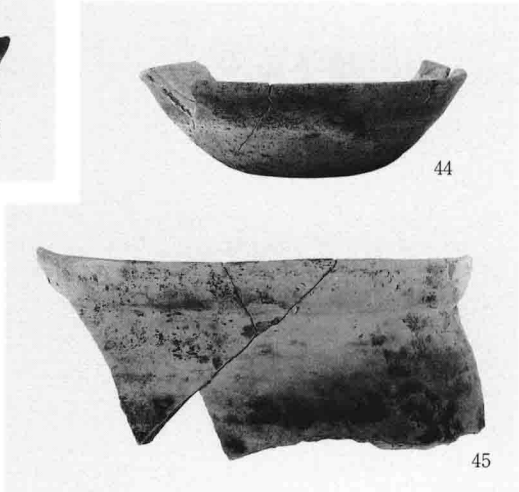




SB13

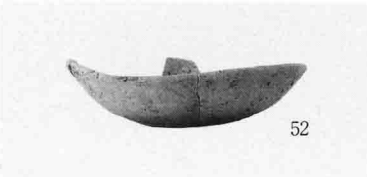


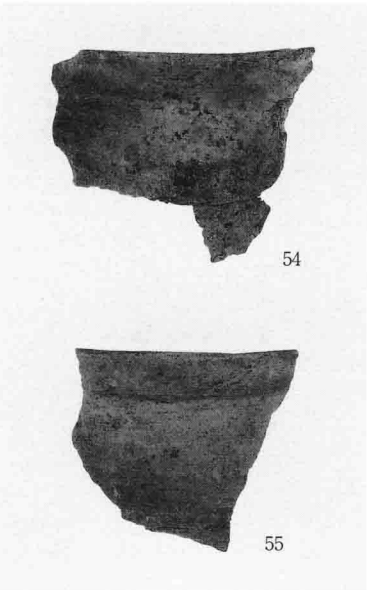

SB16



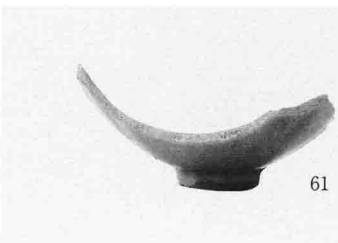

SX3



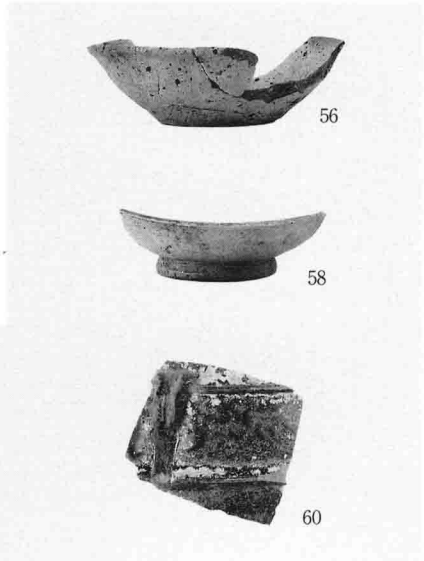

SK7




SX4(2)




検出面

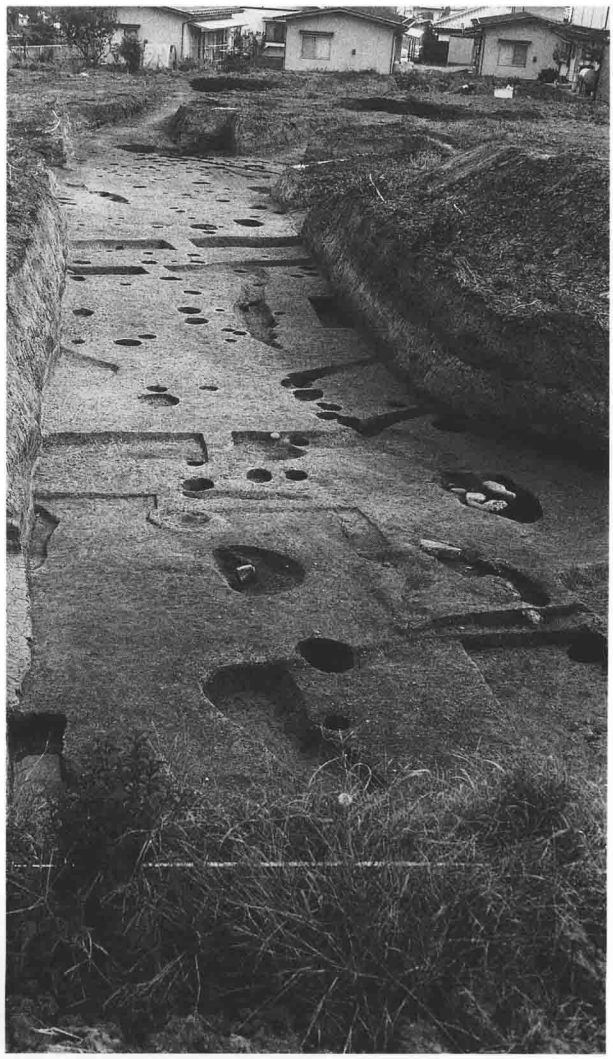


# 第4章　ま　と　め

小板屋遺跡は駒沢川扇状地の扇頂部に位置し、駒沢川右岸の微高地に展開する遺跡である。調査ではそのうち一部を明らかにしたにすぎず、明確な遺跡の性格を把握できなかったが推測を含めて調査結果をまとめてみる。

調査では16の遺構に住居址番号を付したが、遺構・遺物を再検討した結果住居址と認定したものは14軒である。すべて平安時代の所産で、分布状態は散在的在り方を示し、時期も10世紀前半（ＳＢ９・16、ＳＸ４）・中頃（ＳＢ４・13）・後半（ＳＢ４・６・12・14）のものが抽出することができる。こうしたことから遺構の密集度は低く、小さな集落跡を予想する。また、駒沢川下流約300ｍの右岸に展開する浅川西条遺跡との関連も考えなければならない。当遺跡と時期的に合致し、住居址21軒が検出されており、出土遺物も和鏡１面をはじめ土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器が比較的多く出土していることから考えると浅川西条遺跡が主で、当遺跡は従の立場にあるということが可能であろう。すなわち前者が小規模集落の母村的性格を有し、後者は支村的役割を果たしていたものと思われる。このように考えると地形的に標高422ｍラインあたりに遺跡の東限を、西限を等高線の在り方から当調査地付近に求める。南側は調査地の南域をそれほど離れない地域に求める（３図）。

Ⅳ－１　Ｂ区からＡ区



Ⅳ－２　Ｃ区

# 報 告 書 抄 録

| | |
|---|---|
| ふ り が な | あさかわせんじょうちいせきぐん　こいたやいせき |
| 書　　名 | 浅川扇状地遺跡群　小板屋遺跡 |
| 副 書 名 | ―（仮）東邦団地浅川造成地点― |
| シリーズ名 | 長野市の埋蔵文化財 |
| シリーズ番号 | 第94集 |
| 編 著 者 名 | 矢口忠良・小林和子 |
| 編 集 機 関 | 長野市教育委員会埋蔵文化財センター |
| 所　在　地 | 〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地　TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106 |
| 発行年月日 | 1998（平成10）年３月31日 |
| 印　刷　所 | 鬼灯書籍株式会社（長野市柳原2133-5） |

| ふりがな<br>所収遺跡 | ふりがな<br>所　在　地 | コード | | 経緯度<br>（日本測地系） | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | |
| あさかわせんじょうち<br>浅川扇状地<br>いせきぐん<br>遺跡群<br>こいたやいせき<br>小板屋遺跡 | ながのけんながのしあさかわおしだ<br>長野県長野市浅川押田<br>あざこいたや<br>字小板屋256-11他 | 20201 | A－092 | 北緯　36°40′56″<br>東経 138°12′49″ | 971006<br>～<br>971110 | 650m² | 宅地造成 |

| 所収遺跡名 | 種　別 | 主な時代 | 主 な 遺 構 | 主 な 遺 物 | 特 記 事 項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 小板屋遺跡 | | 平安時代 | 住居址　14軒<br>性格不明遺構　5基<br>土坑・溝址・小穴 | 土師器・須恵器・<br>灰釉陶器・緑釉陶器 | 駒沢川扇状地扇頂部の小集落跡 |

## 長野市の埋蔵文化財

1968年　第１集　『信濃長原古墳群』
1976年　第２集　『浅川西条』
1978年　第３集　『中村遺跡』
　　第４集　『塩崎遺跡群』
1979年　第５集　『塩崎遺跡群(2)』
1980年　第６集　『三輪遺跡　―付水内坐一元神社遺跡』
　　第７集　『田中沖遺跡』
　　第８集　『篠ノ井遺跡群』
　　第９集　『四ツ屋遺跡（第１～３次）・徳間遺跡・塩崎遺跡群(3)』
1981年　第10集　『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』
　　第11集　『箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』
1982年　第12集　『浅川扇状地遺跡群　―牟礼バイパスＡ・Ｅ地点』
1983年　第13集　『浅川扇状地遺跡群　迎田遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構』
1984年　第14集　『石川条里的遺構(2)・上駒沢遺跡』
　　第15集　『箱清水遺跡(2)』
1985年　第16集　『石川条里的遺構(3)・(付上駒沢遺跡)』
1986年　第17集　『浅川扇状地遺跡群　―牟礼バイパスＢ・Ｃ・Ｄ地点』
　　第18集　『塩崎遺跡群Ⅳ　市道松節―小田井神社地点遺跡』
1987年　第19集　『土口将軍塚古墳　―重要遺跡確認緊急調査―』
　　第20集　『三輪遺跡(2)』
　　第21集　『芹田小学校遺跡』
　　第22集　『長野吉田高校グランド遺跡』
1988年　第23集　『横田遺跡群　富士宮遺跡』
　　第24集　『塩崎遺跡群Ⅴ　殿屋敷遺跡』
　　第25集　『小島柳原遺跡群　南川向遺跡』
　　第26集　『東番場遺跡』
　　第27集　『小柴見城跡』
　　第28集　『宮崎遺跡』
　　第29集　『浅川扇状地遺跡群　浅川端遺跡』
　　第30集　『地附山古墳群』
　　第31集　『町川田遺跡』
1989年　第32集　『中条遺跡』
　　第33集　『鶴前遺跡』
　　第34集　『石川条里遺跡(4)』
　　第35集　『篠ノ井遺跡群Ⅱ』
1990年　第36集　『屋地遺跡Ⅱ』
　　第37集　『篠ノ井遺跡群Ⅲ』
1991年　第38集　『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)』
　　第39集　『塩崎遺跡群(6)・石川条里遺跡(5)』
　　第40集　『松原遺跡』
　　第41集　『小島柳原遺跡群　中俣遺跡・浅川扇状地遺跡群　押鐘遺跡・檀田遺跡』
1992年　第42集　『田中沖遺跡Ⅱ』
　　第43集　『南宮遺跡』
　　第44集　『塩崎遺跡群(7)』
　　第45集　『石川条里遺跡(6)』
　　第46集　『篠ノ井遺跡群(4)』
　　第47集　『浅川扇状地遺跡群　二ツ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡』（２分冊）
　　第48集　『小島柳原遺跡群　中俣遺跡Ⅱ』
1993年　第49集　『浅川扇状地遺跡群　三輪遺跡(4)』
　　第50集　『浅川扇状地遺跡群　本村東沖遺跡』
　　第51集　『松原遺跡Ⅱ』
　　第52集　『田牧居帰遺跡』
　　第53集　『岩崎遺跡』
　　第54集　『古町遺跡　流人塚』
　　第55集　『浅川扇状地遺跡群　駒沢新町遺跡Ⅱ』
　　第56集　『上見林遺跡』
　　第57集　『石川条里遺跡(7)』
　　第58集　『松原遺跡Ⅲ』
　　第59集　『史跡　松代藩主真田家墓所』
1994年　第60集　『猪平遺跡・宮ノ下遺跡』
　　第61集　『栗田城跡(2)』
　　第62集　『浅川扇状地遺跡群　三輪遺跡(5)・小島柳原遺跡群　上中島遺跡』
　　第63集　『松原遺跡Ⅳ』
　　第64集　『小島柳原遺跡群　宮西遺跡』
　　第65集　『浅川扇状地遺跡群　牟礼バイパスＢ地点遺跡(2)』
　　第66集　『石川条里遺跡(8)』
1995年　第67集　『浅川扇状地遺跡群　本村東沖遺跡Ⅱ』
　　第68集　『栗田城跡(3)』
　　第69集　『浅川扇状地遺跡群　徳間本堂原遺跡』
　　第70集　『八幡田沖遺跡』
　　第71集　『浅川扇状地遺跡群　二ツ宮遺跡(2)・吉田町東遺跡』
　　第72集　『塩崎遺跡群(8)・石川条里遺跡(9)』
　　第73集　『松代城跡』
　　第74集　『松代城跡Ⅱ』
1996年　第75集　『浅川扇状地遺跡群　吉田四ツ屋遺跡・三輪遺跡(6)・棗河原遺跡』
　　第76集　『浅川扇状地遺跡群　駒沢城跡・小島柳原遺跡群　中俣遺跡Ⅲ』
　　第77集　『浅川扇状地遺跡群　松ノ木田遺跡』
　　第78集　『布施塚１号古墳・２号古墳』
1997年　第79集　『柏尾南遺跡』
　　第80集　『小島・柳原遺跡群　水内坐一元神社遺跡Ⅱ』
　　第81集　『裾花川扇状地遺跡群　若宮南遺跡』
　　第82集　『浅川扇状地遺跡群　松ノ木田遺跡Ⅱ』
　　第83集　『下箕ケ谷遺跡』
　　第84集　『浅川扇状地遺跡群　吉田古屋敷遺跡』
　　第85集　『上九反遺跡』
　　第86集　『裾花川扇状地遺跡群　寺村遺跡』
1998年　第87集　『長野遺跡群　西町遺跡』
　　第88集　『小島柳原遺跡群　水内坐一元神社遺跡Ⅲ』
　　第89集　『裾花川扇状地遺跡群　尾張城跡』
　　第90集　『西前山古墳』
　　第91集　『裾花川扇状地遺跡群　西方遺跡・中沢城館跡』
　　第92集　『松原遺跡Ⅴ』
　　第93集　『棗河原遺跡(2)・田中沖遺跡Ⅲ』

長野市の埋蔵文化財第94集

浅川扇状地遺跡群

小板屋遺跡

平成10年３月24日　印刷
平成10年３月31日　発行

編集・発行　長野市教育委員会
　　埋蔵文化財センター

印刷　ほおずき書籍株式会社